

原著論文

アメリカ公共図書館史研究におけるジェンダー

Gender in Historical Research on American Public Libraries

吉田 右子

Yuko YOSHIDA

Résumé

Purpose: This study focuses on gender as a critical aspect of librarianship and examines the framework of critical research through analysis of the historical writings on women in librarianship. It was in the 1970s that Michael H. Harris presented his critical view on libraries as democratic institutes. Since then, new historical research on the American public library has been developed through critical perspectives based on Harris's revisionist interpretation. This critical research reexamines the subjects of research from specific aspects such as class, gender, and minority, and attempts to reconstruct them.

Methods: This study used a survey of existing research on library women's history in historical research on American public libraries to position gender research within the stream of critical research on public libraries. The considerable impact of the concept of gender included in previous work was also examined.

Results: Analysis clearly shows that the structural outline that places female librarians, female supporters and female users of public libraries in contraposition to male librarians on library practices presents possibilities for research on public librarianship. This composition provides a new framework for an approach to existing research that is biased by a dominant point of view. Finally, the findings indicate that the focus on the concept of gender in historical research on public libraries leads to reconsideration of the cultural mainstream and cultural margin. The results suggest ways to reexamine the structure of the cultural politics related to librarianship.

- I. はじめに
 - A. 本研究の目的
 - B. 本研究の枠組み
 - C. 本研究の構成

吉田右子：筑波大学 大学院 図書館情報メディア研究科

Yuko YOSHIDA: Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba
e-mail: yyoshida@slis.tsukuba.ac.jp

受付日：2010年4月4日 改訂稿受付日：2010年7月19日 受理日：2010年8月2日

- II. 図書館における女性をめぐる議論の史的枠組み：レビュー論文を手掛かりにして
 - A. 『図書館専門職における女性の役割 1876年-1976年：女性の参入・功績と図書館専門職における平等化への闘い』
 - B. “フェミニズムとアメリカ女性図書館職”
 - C. “図書館フェミニズムと図書館女性史：アクティヴィズムと学術研究、および公正と文化”
 - D. “『文化の使徒』を読む：「図書館史」の政治学と歴史学的方法論”
- III. 図書館女性研究の主要著作
 - A. 『力と尊厳：図書館界とキャサリン・シャープ』
 - B. 『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』
 - C. 『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍, 1900-1917年』
 - D. 『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』
 - E. 『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』
 - F. 『図書館員としての新しい女性：アデレード・ハッセの生涯』
- IV. 図書館における女性をめぐる議論：二つの系譜
 - A. 図書館女性に関する実践的論考・調査・研究の系譜
 - B. 図書館女性に関する理論的研究の系譜
- V. 批判的ジェンダー研究の視座
 - A. 公共図書館における女性専門職のキャリア形成
 - B. 公共図書館運動をめぐる女性の関与
 - C. 公共図書館と女性利用者
- VI. 批判的ジェンダー研究の成果：図書館実践をめぐる論点に着目して
 - A. 女性による図書館実践への意味付与
 - B. ジェンダーをめぐる図書館の文化政治的権力構造
 - C. 図書館実践における周縁文化への着眼
- VII. おわりに：批判的ジェンダー研究と批判的公共図書館史研究

I. はじめに

ハリス (Michael H. Harris) が民主主義機関としての図書館像にかかわる、主流文化中心の固定的な認識への批判的視座を提示したのは1970年代であった¹⁾。その後ハリスは教育学、社会学など図書館学の周辺領域を視野に入れつつ、ライブラリアンシップに対する批判的まなざしを向けた論考を発表し、図書館が社会的文化機関である限り、その存在は常に文化現象の持つ矛盾や葛藤と無縁ではありえないことを指摘した²⁾。ハリスは、従来の図書館研究における、民主主義機関としての図書館像にかかわる固定的な視座と、主流

文化中心の認識に疑義を唱えたのであり、その後のアメリカ公共図書館史研究は、ハリスの「修正解釈」を踏まえて展開されてきた。

1980年代以降、アメリカ公共図書館史研究を先導してきたウィーガン (Wayne A. Wiegand) は、ハリスの図書館修正解釈を踏まえ、かつライブラリアンシップの既存の枠組みを批判的観点からとらえる方法論を提示している。ウィーガンの公共図書館史研究に対する視座は、1999年に発表された論文「20世紀の図書館・図書館学を振り返る：狭い視野と盲点」で明確に示されている³⁾。その主張の中心は、図書館研究が周辺領域の動向とは無関係に行われ、かつ周辺領域にお

る主たるテーマを無視しているとの指摘にある³⁾ [p.30-33]。

ウィーガンンドは、図書館情報学の問題点を克服しつつ図書館研究を進めていくために、読書や多様な読書装置を対象とする批判的研究であるリーディング・スタディーズの導入を提唱した⁴⁾。そして情報獲得の手段である読書および図書館の新たな像を描き出そうとする試みを明らかにした⁵⁾。リーディング・スタディーズは、関係しあう複数の諸力が働く場所として図書館や読みの現場を分析することによって、図書館をめぐる文化現象に内在する権力構造を明らかにしようとする点で独創的である⁶⁾。

公共図書館史の批判的研究は、アメリカ公共図書館史研究に対して単なる史的事象の記述から脱却し、研究対象となる事象を特定の切り口から再検証し、再構築していくことを要求している。分析対象の中心となるのは、階級、ジェンダー、人種、民族的マイノリティといった今までの図書館研究に欠落していた概念である。批判的研究は周縁文化へ着目することで、主流文化を中心とした研究そのものに疑義を唱え、ライブラリアンシップを取り巻く文化政治構造の見直しを提案するものである。

A. 本研究の目的

本研究では図書館専門職の構造を解明するための鍵概念の一つであるジェンダー（文化的性差）を公共図書館史の批判的研究の分析軸の一つとみなし、ジェンダーという概念を核に図書館女性史研究の研究成果を分析していく。

ジェンダーは“1960年代にアメリカで始まった women's studies（女性学）が盛んになる過程で……文化的・社会的意味づけをされた両性を示す用語”として用いられるようになった⁷⁾。図書館界では女性が図書館に労働力として参入した19世紀後半から、男性と女性の関係性、女性の役割や位置づけなどをめぐる議論が開始され、図書館の女性専門職にかかわる相当数の文献が蓄積されている。

批判的公共図書館史研究の文脈で言えば、ジェ

ンダーの概念が持ち込まれることによって、男性と女性の社会的・文化的・政治的差異に対し、より意識的な視点を持つ図書館女性史研究の創出が促された。つまり、男性と女性の関係性、女性の役割や位置づけといった論点に、ジェンダーという概念が与えられることによって、問題を批判的に分析していく枠組みが用意されたのである。

こうした経緯を踏まえ、本研究では、19世紀後半からはじまった図書館における女性をめぐる議論の中にジェンダーという概念が投入され、研究に対し深みを与えていく史的展開を押さえる。とりわけ1990年代以降の図書館女性史の研究は、それ以前の研究と比較すると、手法、内容の両面において進展を遂げている。すなわち研究対象に対する批判的な視座を確保しつつ、図書館と女性を取り巻く複合的な要因を分析する批判的ジェンダー研究として展開されている。

批判的ジェンダー研究で問われている課題や問題意識は、公共図書館史の批判的研究にとって示唆的な要素を多く含むものである。にもかかわらず、図書館女性研究を批判的研究という視点からとらえ検討した研究は、図書館史研究をリードしてきたアメリカにおいてもなされていない。本研究では公共図書館を対象とする図書館女性研究の分析を通じて、ジェンダーという概念が公共図書館研究にとってどのような分析軸となりうるのかを解明する。これらの課題を探ることによって、これまでになされてきた図書館における図書館と女性に関わる研究の理解を深化させると同時に、批判的公共図書館史研究の可能性と方向性を明らかにすることができる。

本稿では批判的ジェンダー研究の背景を押さえるために図書館における女性をめぐる議論全体の展開をみていくが、現在までに蓄積されてきた個々の文献の内容を網羅的に押さえることは、本研究の目的でない。それよりも議論の流れの中に見出すことができるいくつかの転換点を明らかにし、そうした転換点が図書館女性研究および批判的公共図書館史研究にとってどのような意味を持つのかを検討することに重点を置く。

B. 本研究の枠組み

図書館における女性をめぐる議論には大きく分けて二つの系譜がある。一つは実践に近い論考、調査、研究であり、もう一方の系譜は、主な目的を学術的な分析に置く研究である。前者は図書館女性専門職の位置づけや特性に焦点を当てた論考が多く、実践に近いスタンスから行われ、実践に対して何らかの提言を行う場合もある。後者は図書館におけるジェンダー概念の理論的解明、図書館女性専門職の捉え直しなどに焦点を当てた理論的研究である。

図書館を対象とする議論は多様なレベルで行われ、実践と理論・研究を厳密に分けることはできないが、公共図書館史研究の分析軸としてのジェンダー概念を検討することを目的とする本研究では、「実践的論考・調査・研究」と「理論的研究」をあえて区別し、後者に焦点を当てて論じていくこととしたい。というのも、理論的研究ではジェンダー概念に対する深い掘り下げが見られ、ジェンダー概念の図書館史研究における分析軸としての有効性を検証するために必要な深度が確保されているからである。両者の系譜については、第IV章であらためて論じるが、本稿全体を通して、図書館における女性に関する理論的研究を中心に検討することとし、女性専門職に関わる定量的調査などについては、補助的な言及にとどめる。

C. 本研究の構成

本研究は次のような手順で進める。第II章から第IV章は、図書館における女性をめぐる議論の歴史的展開を論じる。第II章で、図書館女性に関する文献を対象としたレビュー論文を手掛かりとして図書館における女性をめぐる議論の発展段階を把握する^{8), 9), 10), 11)}。第III章では1960年代以降に行われた図書館女性に関する理論的研究の代表的著作に焦点を当てて、図書館における女性をめぐる議論のアカデミックな発展をみていく^{12), 13), 14), 15), 16), 17), 18)}。取り上げた六つの研究は、図書館女性研究史の中で新しい方法論や分析視点を導入することによって女性専門職にかかわる新たな見解を提示し、後続する研究に影響を与

えた業績である。第IV章では実践寄りの議論も視野に入れて、図書館における女性をめぐる議論全体の史的展開を整理し、現在の到達点を示す。

第V章から第VI章は、1990年代以降の批判的ジェンダー研究に焦点を当てて、公共図書館史研究の分析軸としてのジェンダー概念を探っていく。1990年代は、図書館女性研究が批判的視座を持つジェンダー研究として本格的に開花した時期である。本研究ではこの時期に提出されたジェンダー研究について、研究課題、研究枠組み、研究成果を整理する。取り上げた先行研究はいずれも、専門職の形成、図書館実践への女性の関わり、図書館利用者としての女性といった特定のテーマを設定する中で、女性をめぐる文化政治学的な権力構造に着目した批判的ジェンダー研究である。これらの研究のジェンダー研究としての成果と図書館史の批判的研究としての到達点をみていくことで、最終的に図書館実践・研究を批判的に再構築する鍵としてのジェンダー概念の有効性について明らかにしたいと考える。

II. 図書館における女性をめぐる議論の史的枠組み：レビュー論文を手掛かりにして

図書館における女性にかかわる議論は、女性が図書館専門職として図書館界に参入した19世紀後半を出発点として、現在までその成果が蓄積されてきた。本章では図書館女性に関する文献を対象としたレビュー論文の中で提示されてきた、図書館女性専門職に関わる論考と研究の史的発展をみていく。

図書館女性にかかわる論考の蓄積をもとに、これまで図書館女性に関する文献を対象としたレビュー論文が複数書かれてきた。これらのレビューは、図書館における女性をめぐる議論の史的枠組みを考える上で示唆に富む。レビューは書かれた時代は異なるものの、女性をめぐる状況を包括的に概観し、レビューが書かれた時点までの女性にかかわる議論の到達点を示しているからである。ここでは代表的なレビュー論文として、次の四つの論文を取り上げる。

1979年 Kathleen Weibel・Kathleen M. Heim 編

『図書館専門職における女性の役割 1876年-1976年：女性の参入・功績と図書館専門職における平等化への闘い』(*The Role of Women in Librarianship, 1876-1976: The Entry, Advancement and Struggle for Equalization in One Profession*)

1989年 田口瑛子 “フェミニズムとアメリカ女性図書館職”

2000年 Suzanne Hildenbrand “図書館フェミニズムと図書館女性史” (*Library Feminism and Library Women's History: Activism and Scholarship, Equity and Culture*)

2003年 Christine Pawley “『文化の使徒』を読む：「図書館史」の政治学と歴史学的方法論” (*Reading Apostles of Culture: The Politics and Historiography of 'Library History'*)

ウェイベル (Kathleen Weibel and Kathleen M. Heim) らのレビュー論文は第二次フェミニズム運動を背景として刊行されたもので、19世紀末から1970年代半ばまでの図書館女性専門職の論考を扱っている。包括的な文献リストがその後の図書館女性研究の基盤となった。田口瑛子のレビュー論文は社会運動であるフェミニズムと図書館女性専門職の動向の関係性を検討している。ヒルデンブランド (Suzanne Hildenbrand) のレビュー論文は、1990年代までの図書館女性史研究と図書館における女性をめぐる文献を包括的に展望している。ポーリー (Christine Pawley) の論文は図書館女性史研究の転換点となったギャリソン (Dee Garrison) の著作『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』(*Apostles of Culture: The Public Librarian and American Society, 1876-1920*)¹³⁾ を中心に、その前後の図書館女性史の研究について分析している。

A. 『図書館専門職における女性の役割 1876年-1976年：女性の参入・功績と図書館専門職における平等化への闘い』

ウェイベルらは1979年に図書館における女性史に関する文献集『図書館専門職における女性の

役割 1876年-1976年：女性の参入・功績と図書館専門職における平等化への闘い』⁸⁾ を編纂した。同書は1876年から1976年までの図書館女性専門職についての主要な文献を集めた上で、網羅的な文献リストを付している。図書館界に女性の専門職が出現する19世紀末から1970年代半ばまでに発表された女性と図書館にかかわる論考の史的展開を示した同著作は、最初のまとまった形で図書館女性史のレビューとなった。

伝統的に図書館は男性の職場であったが、19世紀末に公共図書館の仕事は家庭内の女性の伝統的な役割の延長上にある女性にふさわしい職場として認識されるようになっていく。図書館専門職は慈善的な特徴を持ち、高度なスキルや体力は要求されず社会との接点が少ない職業だとみなされた⁸⁾ [p. xiii]。

ウェイベルは1876年から1976年までの図書館女性専門職史を(1)1876年-1900年：専門職の出現、(2)1901年-1921年：女性参政権時代、(3)1922年-1940年：両大戦間、(4)1941年-1965年：第二次世界大戦および戦後、(5)1966年-1976年：第二次フェミニズム運動の五つの時代に分けている。ウェイベルは各々の時代の代表的な文献を提示しているが、各時代の概要は以下の通りである。

1. 第1の時代

図書館が男性の職場から女性の職場になった19世紀後半から20世紀初頭にかけての主要な文献が示されている。この時期にアメリカ図書館協会では、女性専門職のための部門を設立しようとする動きがある一方で、性差は業務に関係がないとする意見も支持されていた⁸⁾ [p. xv-xvii]。

2. 第2の時代

20世紀に入ると、女性の職場での機会や賃金の平等に関する議論が出現する。アメリカ図書館協会会長パトナム (Herbert Putnam) に依頼されてアメリカ女性図書館員の状況について包括的な調査を行ったフェアチャイルド (Salome Cutler Fairchild) は、女性の低い地位と低い給与レベル

について報告した⁸⁾ [p. xviii]。

3. 第3の時代

両大戦の間、女性専門職は自分たちの地位について発言を続けていたものの必ずしも能動的な地位向上活動が展開されなかったこと、女性の専門的な資質についての議論よりも男性の雇用についての議論が高まったことをウェイベルは指摘している。図書館専門職における女性の職員数における優勢を踏まえた上で男性の専門職の必要性を主張する論考、ポストが余っているにもかかわらず女性が管理職に就けない事実を示す論考などが示された。女性専門職の進出から半世紀近く経っても、女性図書館員の多くが補助的な役割に置かれていたことが示されている⁸⁾ [p. xviii-xix]。

4. 第4の時代

第4の時代：ウェイベルによれば第二次世界大戦から1960年代半ばまで、専門職内部に存在する男女間の差別についての議論は相対的に鎮静化した。1952年にブライアン（Alice Bryan）が全米公共図書館を対象とした大規模調査として行われた「公共図書館調査」の報告書として『公共図書館員』（The Public Librarian）¹⁹⁾を刊行し、図書館職の男性と女性の二重キャリア構造を実証的に検証した⁸⁾ [p. xx-xxi]。

5. 第5の時代

1966年から1976年をウェイベルは第二次フェミニズム運動の時期と位置づける。図書館界は全米に広がった女性解放運動の波に包み込まれた。19世紀後半から女性について継続的に議論がなされてきた図書館界ではあったが、そこで問われていたのは、専門職領域の内部の構造や個人の資質であった。これに対して第二次フェミニズム運動では、社会的状況によって規定されるものとして図書館女性専門職をとらえる見方が出てきた。この時期に、図書館女性専門職をテーマとする重要な論文が提出されている。1972年にギャリソン（Dee Garrison）が*Journal of Social History*に発表した「優しい技能要員：公共図書館界の女性

化 1876年-1920年』（The Tender Technicians: The Feminization of Public Librarianship, 1876-1905）²⁰⁾と1974年にシラー（Anita Schiller）が『アドヴァンシーズ・イン・ライブラリアンシップ』（*Advances in Librarianship*）に発表した「図書館専門職における女性」（Women in Librarianship）²¹⁾である。ギャリソンの論文は1979年に『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾に結実し、図書館女性史研究の記念碑的著作となった。ギャリソンが女性専門職の出現に焦点を当てていたのに対し、シラーはアメリカ図書館界における女性の位置づけを給与、役職、職能団体での活動などから実証的に明らかにした⁸⁾ [p. xxi-xxiii]。

五つの時代の主要な文献のレビューを通して、ウェイベルは女性専門職と女性図書館史研究の流れを包括的に描き出している。『図書館専門職における女性の役割 1876年-1976年：女性の参入・功績と図書館専門職における平等化への闘い』⁸⁾には主要文献の解説とともに包括的な文献リストが添付され、その後、刊行されるようになった図書館女性専門職に関する主題書誌『性ゆえに：図書館界における女性の地位に関する文献解題』（*On Account of Sex: An Annotated Bibliography on the Status of Women in Librarianship*）²²⁾の基盤となった。

B. 「フェミニズムとアメリカ女性図書館職」

田口は「フェミニズムとアメリカ女性図書館職」という切り口から女性専門職の歴史を検討し、アメリカにおける女性図書館職員の位置づけを分析している⁹⁾。田口は女性専門職を二つの時代、すなわち婦人参政権運動（19世紀後半から20世紀初頭）と女性解放運動（1960年代後半）の二つの時代に分けた上で各々の時代背景を踏まえ、図書館職における女性専門職を考察した⁹⁾。

第1の時代には、公立図書館の発展とともに、多くの女性図書館員が図書館界に進出した。当時の文献は、図書館業務が家庭での女性の役割の延長線上であったために、女性の参画が可能であったことを示している。女性図書館員の位置づけに

については、主として給与や昇給などの側面から調査が行われており、女性が業務や能力に合った給与を受けていないことが明らかになっている。しかしそうした格差は女性の運営管理能力が劣っているからだとする主張や、女性は図書館業務の補助職としてその能力を最大限に発揮することができるという論調がみられた⁹⁾ [p. 31-35]。

第2の時代はラディカリズムの時代であり、図書館界に性差別と戦う女性グループが結成された。1970年にアメリカ図書館協会内に設置された「女性図書館職員タスクフォース」はその代表例である。1971年には『ライブラリー・ジャーナル』(*Library Journal*)で女性図書館員問題の特集が組まれた。1975年にはアメリカ図書館協会に「女性の地位委員会」(COSWL)が設立され、女性図書館員のための組織である「女性図書館労働者」(WLW)が結成された。いずれの団体も、女性の雇用問題、低賃金、昇進問題、性差別にかかわる改善を女性の視点から議論するための場として機能していた。

田口はこの時代の女性専門職をめぐる社会的動きについて、これらの運動が女性図書館員に関わる研究によって支えられていたことを指摘する。1960年代後半から実施された調査が女性専門職に関わる現状を明らかにし、それが女性運動の理念的基盤になったからである⁹⁾ [p. 35-42]。

第1の時代と第2の時代は、図書館女性専門職の出現および図書館女性専門職の地位向上運動によって特徴づけられる図書館女性史の重要な節目である。特に第2の時代に“性差は生来的なものではなく、社会化されたものであることが、解明されはじめ”⁹⁾ [p. 43] ジェンダーの概念が、女性運動・女性研究における理念的枠組みの一つとなった。

C. 「図書館フェミニズムと図書館女性史：アクティヴィズムと学術研究、および公正と文化」

ヒルデンプランドは図書館女性専門職に関して積極的に発言してきた研究者として知られる。2000年に発表された「図書館フェミニズムと図

書館女性史：アクティヴィズムと学術研究、および公正と文化」は、女性史研究をフェミニストの立場から概観し、分析したレビュー論文である¹⁰⁾。

ヒルデンプランドは、1950年代から1990年代の図書館女性史を振り返り、時代区分とその時代を映し出す言葉を与えている。それは“合意：第二次世界大戦と冷戦の余波”，“公正論争：60年代およびそれ以後”，“拡大と展開：80年代”，“あいまいな90年代”の四つである。

論文の中でヒルデンプランドが批判の対象としたのは、図書館専門職における女性の低賃金、低地位、その他の問題の責任は女性にあるとする修正解釈派の説明である。これは20世紀初頭の図書館界への女性の参入を説明するなかで生まれた言説であり、1979年のギャリソンの著作『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾が使った解釈である。

1950年代には、ブライアの『公共図書館員』に代表される女性専門職の低い位置づけを示す文献が刊行された。またわずかながら、女性図書館員の伝記がこの時期に発表された¹⁰⁾ [p. 78-79]。

1960年代は公正さの追求を目指した多様な運動が繰り広げられた。ただし図書館界では女性差別への問題意識が高いフェミニストもいたものの、フェミニズム運動の発展は遅かったことを指摘している¹⁰⁾ [p. 80]。

ヒルデンプランドが1960年代以降の代表的著作としてあげるのは、図書館専門職の女性化の過程を扱ったウェルズ(Sharon B. Wells)が1967年にシカゴ大学に修士論文として提出した「アメリカ図書館専門職における女性化：1876年-1923年」(*The Feminization of the American Library Profession, 1876 to 1923*)²³⁾とシラーの『図書館専門職における女性』²¹⁾である。ヒルデンプランドは、前述したウェイベルらの『図書館専門職における女性の役割 1876年-1976年：女性の参入・功績と図書館専門職における平等化への闘い』⁸⁾についても言及し、この文献集がその後の女性史研究の出発点となったことを評価している¹⁰⁾ [p. 81]。

1960年代以降、フェミニズム運動と相まって女性指導者が求められたこともあり、伝記的な研究が行われている。代表作は、グロツィンガー (Laurel A. Grotzinger) が1964年にイリノイ大学に提出した博士論文であるシャープ (Katharine Sharp) の伝記『力と尊厳：図書館界とキャサリン・シャープ』(*The Power and the Dignity: Librarianship and Katharine Sharp*)¹²⁾ である¹⁰⁾ [p. 82]。

この時期の研究はそれ以前と同様、女性の地位の低さを図書館女性専門職の数における優勢に帰するものであった。ヒルデンブランドは女性化が専門職のレベルの低下を招いたという従来の議論を決定づけた研究としてギャリソンの著作を位置づけ、女性問題に関する保守主義を糾弾している¹⁰⁾ [p. 83-84]。

1980年代の図書館界における論点として、ヒルデンブランドは積極的差別是正措置と公正賃金をあげている。図書館女性専門職の地位に関するさまざまな統計調査が実施されたほか、1984年に女性専門職の書誌『性ゆえに：図書館界における女性の地位に関する文献解題』²²⁾ が刊行された。研究面では、女性史研究の手法が女性図書館員の論考に援用されるようになった。1980年代に行われた伝記研究は多彩であった。女性図書館員を集团的にとらえた伝記研究や、文化的・民族的マイノリティの女性図書館員を取り上げる伝記研究が行われるようになった¹⁰⁾ [p. 83-85]。ヒルデンブランドは1980年代をフェミニストによる積極的活動主義と図書館女性史研究の“拡大と展開”の時代としている。

1990年代に入ると図書館女性史研究は保守主義に傾き、理論研究において伝統的な女性像を強調することで、女性専門職における公正へのまなざしが弱まった。また保守的な研究動向が理論研究と活動家の断絶を作り出し、理論と実践の乖離がみられるようになったというのがヒルデンブランドの主張である。さらに1990年代になって女性を非難する論文や女性文化を強調する論文が再出現したことも指摘している¹⁰⁾ [p. 86-87]。

女性研究が保守化する一方で、1990年代は新

しい女性専門職像が描かれた時代でもあった。その成果としてヒルデンブランドは1994年のパセット (Joanne E. Passet) による西部の女性図書館員に関する研究、1995年に刊行されたヴァンスリック (Abigail A. Van Slyck) によるカーネギー図書館における女性図書館員の研究をあげている¹⁰⁾ [p. 87]。

1990年代に入ると図書館専門職のジェンダー性を詳しく分析する研究が行われるようになり、女性の無給労働や、図書館女性の地位、児童サービスにあらわれる女性性などがテーマとして扱われている。ヒルデンブランドは、女性特有の文化的価値が専門職活動に及ぼす影響を扱った研究が、図書館に関わる女性の利他的な活動や非公式な指導関係を取り上げて専門職の発展に結びつけていることを指摘した¹⁰⁾ [p. 87-88]。

ヒルデンブランドは女性専門職の指導力や卓越した業績を強調した研究を紹介することによって、1990年代の伝記研究の中に公正の軌跡を見出している。また1990年代になって増加した有色人種の女性に関わる文献が、図書館女性史研究の層を厚くした点を評価している。公正主義に基づく歴史記述、社会的・文化的マイノリティをめぐる図書館活動に立脚した研究に、ヒルデンブランドは図書館研究の発展の道筋を見出したのである¹⁰⁾ [p. 89-91]。

ヒルデンブランドは、1990年代の図書館研究者の多くが活動家との距離を置いていること、公正を追究するよりもむしろ女性文化を強調したり、伝統的な女性の役割を再確認する図書館関係の文献が増えていることを指摘している¹⁰⁾ [p. 86]。

D. 『文化の使徒』を読む：「図書館史」の政治学と歴史学的方法論

1979年に刊行された図書館女性史研究の記念碑的な著作『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾ の新装版が2003年に刊行された。ポーリーによる同書の序文『文化の使徒』を読む：「図書館史」の政治学と歴史学的方法論」は、公共図書館史研究および図書

館女性史研究の中に、ギャリソンの著作を位置づけることを目的に書かれたレビュー論文である¹¹⁾。ポーリーはギャリソンが著作で扱った研究テーマや方法論を参照しながら、ギャリソン登場前後の公共図書館史研究について包括的に展望している。とりわけ図書館史および図書館女性史研究に出現する他領域の研究者「アウトサイダー」の図書館史研究への影響に焦点を当てている。

ポーリーは、1970年代後半にハリスが登場するまで、図書館史研究が閉ざされたコミュニティの中で行われ、図書館内部を対象とした分析にとどまり批判的な視点を持たなかったことを指摘した。図書館に対する既存の捉え方に疑義を呈したギャリソンはハリスとともに修正解釈派とみなされた。ハリスが図書館史に持ち込んだ階級概念に、ギャリソンは女性化という分析視点を加えて、図書館史を解釈した。ただしギャリソンは歴史学者であり図書館学のコミュニティの外にいたという点で、ハリスとは異なる立場にいた¹¹⁾ [p. xx]。つまり最初の本格的な女性専門職の研究書はアウトサイダー研究者によって提示されたのであった。ギャリソンの業績は現在もなお図書館女性史研究の代表作としてみなされているものの、図書館職の女性化の解釈をめぐって激しい批判にさらされた。その批判の中心は被害者である女性を専門職のレベルを低く抑えている要因だとみなしたギャリソンの解釈に対するものであった。

ポーリーは1970年代の女性史研究の問題点として、限定的なデータからの一般的解釈の導出や状況に関する浅い考察による女性像の一般化を挙げており、ギャリソンの解釈がそうした問題点を孕んでいたことを指摘している。一般化の原因には、1970年代に女性専門職の伝記がほとんど存在していなかったという事情もあった。公私両面を視野に入れた女性専門職の研究の出現は、関連する一次史料が整備された1990年代以降のことである¹¹⁾ [p. xxii-xxiii]。1980年代のフーコー(Michael Foucault)の登場が、歴史研究の転換点となった。それは主流のイデオロギーへの批判とマイノリティへの着目という枠組みの中で、歴史的事象にかかわる言語と権力への記述を求めるも

のであった。図書館女性史研究においても革新主義時代の女性に関わる従来の言説が捉え直されるようになっていった¹¹⁾ [p. xxiv]。

1990年代に入るとギャリソンの『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾をめぐる議論を超える女性研究が現れはじめる。ポーリーは代表作としてパセットの1994年に刊行された『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍、1900-1917年』(*Cultural Crusaders: Women Librarians in the American West, 1900-1917*)¹⁴⁾と、ジェンキンスの(Christine A. Jenkins)1995年の博士論文「人目につかない強靱さ：児童サービス担当専門職、アメリカ図書館協会、若者の知的自由：1939年-1955年」(*The Strength of the Inconspicuous: Youth Services Librarians, the American Library Association, and Intellectual Freedom for the Young, 1939-1955*)の業績²⁴⁾を紹介している¹¹⁾ [p. xxv]。

両研究はいずれも著作の中で、図書館女性専門職研究の課題を指摘していた。パセットは図書館史研究に占める女性研究の絶対量の不足を指摘した。ジェンキンスは、女性が中核を占める目録業務や児童サービスなどが、研究対象として扱われてこなかったことを指摘した。1950年代半ばに行われた大規模図書館調査である「公共図書館調査」を総括したリー(Robert D. Leigh)は児童サービスを無視していた。さらに1970年代の女性の歴史研究者が、家庭的なるものを研究テーマとして忌避したことも、児童サービス研究軽視の傾向に拍車をかけた¹¹⁾ [p. xxv]。1990年代には、再び女性専門職のジェンダー的特徴に焦点を当てた研究が増加した。代表的な著作として、マローン(Cheryl Knott Malone)²⁵⁾とハリス(Roma M. Harris)²⁶⁾の研究がある。これは階級理論を援用した専門職論の成果がこの時期のアメリカで盛んに出版されたことの影響であるとポーリーはみている¹¹⁾ [p. xxv]。

ポーリーはギャリソン以降の図書館史研究を包括的に展望した上で、ギャリソンの著作が欠点を持つにせよ、ジェンダー概念を図書館の領域に導入した着眼点を評価している。また、現在でもな

おこの領域に関する包括的な図書館史の記述としては、ギャリソンの著作が唯一の存在であることを強調している。1990年代以降、分析精度の高い研究は多く行われるようになったが、図書館における女性専門職の全体像を映し出すような研究がいまだに現れていないからである¹¹⁾ [p. xxix]。この意味では図書館女性史研究においてギャリソンを乗り越える研究は出現しておらず、「ギャリソン以後の時代」が未だ続いているといってもよい。

III. 図書館女性研究の主要著作

本章では図書館女性研究の主要著作に焦点を当て、その研究成果を検討していく。ここで主要著作として取り上げるのは、「図書館女性に関する理論的研究」として位置づけられる研究業績であり、1990年代以降の批判的ジェンダー研究の系譜に先行する女性研究である。タイトルを以下に示す。

- 1964年 Laurel A. Grotzinger 『力と尊厳：図書館界とキャサリン・シャープ』 (*The Power and the Dignity: Librarianship and Katharine Sharp*)
- 1979年 Dee Garrison 『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』 (*Apostles of Culture: The Public Librarian and American Society, 1876-1920*)
- 1994年 Joanne E. Passet 『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍, 1900-1917年』 (*Cultural Crusaders: Women Librarians in the American West, 1900-1917*)
- 1995年 Abigail Van Slyck 『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』 (*Free to All: Carnegie Libraries and American Culture, 1890-1920*)
- 2001年 Christine Pawley 『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』 (*Reading on the Middle Border: The Culture of Print in Late-Nineteenth-Century Osage, Iowa*)
- 2006年 Clare Beck 『図書館員としての新しい

女性：アデレード・ハッセの生涯』 (*The New Woman as Librarian: the Career of Adelaide Hasse*)

グロツィンガーの著作は、図書館女性に関する理論的研究の先駆的な成果である。ギャリソンの著作は19世紀後半から始まった図書館女性専門職に関わる議論を収斂させると同時に、その後の女性史研究において批判の対象となる論点を提示した点で、図書館女性研究史において最も影響力のある業績である。パセットとヴァンスリックの著作は、ともに女性専門職の新たな解釈の提示によって、専門職の捉え直しに貢献した。ポーリーの著作は特定地域の図書館実践を、ジェンダー、階級、宗派、民族などの分析視角から実証的に分析し、公共図書館史研究の新しい方法論を切り開いた。ベック (Clare Beck) によるアデレード・ハッセ (Adelaide Hasse) の伝記は一次史料を駆使して新しい女性専門職像を浮かび上がらせ、既存の研究を乗り越えた女性専門職にかかわる業績として位置づけられる。

A. 『力と尊厳：図書館界とキャサリン・シャープ』

『力と尊厳：図書館界とキャサリン・シャープ』¹²⁾ は、グロツィンガーが1966年にイリノイ大学に提出した博士論文であり、19世紀後半に活動した図書館指導者シャープ (Katharine Sharp) の本格的な評伝である。グロツィンガーはシャープの生涯を、一次史料を駆使して300ページ以上に及ぶ大作にまとめあげた。イリノイ大学の文書や私信、親交が深かったデュエイ (Melvil Dewey) にかかわる文書が人物像の分析に使われ、シャープの公私にわたる生涯が明らかにされている。

シャープはアメリカにおける図書館員養成の黎明期にデュエイの開設したコロンビア大学で図書館学を学びその後は、アーマー工科大学図書館学校、イリノイ州立図書館学校で図書館員養成者として数多くの女性図書館員を育成した。

グロツィンガーはシャープの薫陶を受けた教え子らの言説やシャープ自身の発言を丹念に拾い上

げながら、文化的変革期にあった19世紀末のアメリカで、最初の近代的な図書館養成教育を受け、最前線で公共図書館の改革を進めた人物としてシャープを描いている。本著作は最初の女性専門職の研究書として図書館女性研究史上に位置づけられる。またシャープの生涯を公的生活だけでなく私的生活にも焦点を当てて描き出している点で、女性専門職を対象とする伝記研究の代表作でもある。

B. 『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』

1. 『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』と図書館専門職の女性化モデル

ギャリソンの著作『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾は1979年に刊行された。同書はアメリカ図書館協会幹部とデューイおよび女性図書館員について修正主義の立場から分析を行い、図書館専門職の女性化と専門職としての位置づけを解明した。ギャリソンが図書館職の女性化をネガティブにとらえる結論を出したことにより、図書館界ではフェミニストを中心にギャリソンを批判する論争が生じた。

ギャリソンは、女性専門職が図書館の領域に進出していった経緯と理由を、ソーシャルワークに従事する女性専門職を参照しながら分析した。高学歴の女性が働くための数少ない専門職であったことが主な要因となり、19世紀末に図書館の世界に女性専門職が大量に流入した。ギャリソンは図書館における女性専門職を高学歴であるにもかかわらず、安い給与に甘んじたグループとして規定した。そして女性専門職が図書館界に大量に存在したことで、公共図書館の位置づけそのものが低く抑えられてしまったと結論づけた。さらに多くの女性専門職の上に立つ少数の男性幹部が、女性を図書館で採用することの利点として、女性の低い賃金を容認していたことを指摘した¹³⁾ [p. 245]。

図書館で働く女性専門職は、家庭的な場としての図書館のイメージを実質的に補強するために必

要な存在であった。“理想的図書館は家庭の温かさと団らんを利用者に提供する”ことであり“家庭こそ女性本来の場所で、女性がきれいにし祝福するのに最適の場所であった”¹³⁾ [p. 251] ため、両者の接合が図書館における女性専門職の存在を正当化した。特に児童サービスを担当する女性図書館員は、ヴィクトリア朝の女性のステレオタイプを体現化していた¹³⁾ [p. 253]。そして多くの女性図書館員は“本質的に反フェミニスト的な性イデオロギーの信奉者であり”自分たちの仕事が生来的に限定されているということに対して抗議することはなかった¹³⁾ [p. 7]。

ギャリソンは最終的に、“仕事に対する専門職的な専心傾倒感とか、奉仕するよりむしろ指導するという意欲、そして専門職の権利と責任の明確な概念化”が図書館職に欠けているのは、図書館専門職の女性化がその理由であると結論づけたのである¹³⁾ [p. 264-265]。

2. 『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』をめぐる議論

ギャリソンの研究は図書館女性史研究の代表作に位置づけられてきたが、同時に社会的文脈を考慮せず女性図書館員の当時の言説を採用し、女性図書館員が公共図書館の位置づけを貶めているとして、批判の対象となった²⁷⁾ [p. 10]。

マック (Mary Niles Maack) はギャリソンが選んだ女性専門職の中に、ミネアポリス公共図書館のカントリーマン (Gratia Countryman) やアメリカ図書館協会事務局長補佐のボーグル (Sarah Bogle), オークランド公共図書館館長クールバース (Ina Coolbrith), ニューヨーク公共図書館の図書館拡張部門のフランク (Mary Frank) といった重要な人物が抜け落ちていたことを指摘し、初期の女性図書館員は女性の性に基づく役割に疑問を持たなかったというギャリソンの説明に疑問を呈した²⁸⁾ [p. 165-166]。ギャリソンをはじめとする図書館の修正解釈派が過度な一般化を行っていることを問題視し、図書館員を複層的に見ていく必要性を示唆した²⁸⁾ [p. 180]。

カウフマン (Polly Welts Kaufman) は、ギャリ

ソンが指導者の分析のために規範的な文献を参照したために、間違っただけの人物像を描き出した点を批判している²⁹⁾ [p. 85]。ギャリソンの女性化をめぐる解釈は犠牲者を責めているが、女性が職員数において優勢な職種であるから図書館職が専門職として低く評価され給与が低いのではなく、低評価・低賃金であるから女性が数の上で優勢になるとしたシラーの解釈を援用してギャリソンの解釈に反駁した²⁹⁾ [p. 86]。

批判の急先鋒となったヒルデブランドは“女性図書館員を含めて人びとが女性や図書館職について言ったことに、そういった発言をその当時の状況を検討することなしに、依存した”ことを一貫して批判し続けてきた²⁷⁾ [p. 10]。

1983年に刊行された『図書館界における女性の地位』(*The Status of Women in Librarianship*)に収められた「修正解釈対現実：公共図書館運動史における女性 1876年-1920年」(Revision versus Reality: Women in the History of the Public Library Movement, 1876-1920)³⁰⁾は、ギャリソンへの批判が最もまとまった形で展開された論文である³¹⁾。この論文の中でヒルデブランドは、教育学からの理論的影響を強く受けた図書館研究における修正主義解釈の検討から、議論を始めている。ギャリソンはハリスと並び修正主義解釈派の代表であり、図書館を社会コントロールのための装置として、図書館員を社会コントロールのための主導者としてとらえる立場を取っていたからである。

ギャリソンによれば、公共図書館が目標に掲げていた社会コントロールに失敗していることも、図書館職が理論的基盤を確立できなかったことも、すべて女性専門職の数の上での優勢が理由である³⁰⁾ [p. 9]。ギャリソンは女性の差別的な状況を把握しているものの、その原因を女性特有の性質に見出したが、この見解はギャリソンの女性に対する偏見から生じているとヒルデブランドは批判した³⁰⁾ [p. 10]。ヒルデブランドはギャリソンは図書館界の現実を正確に読み取っていないとし、ギャリソンが主張するように“家庭から社会へ”という女性の社会参加の単純な図式化は

できないと論じた³⁰⁾ [p. 11]。ギャリソンは女性化という政治的な課題を提出しながらも政治的な分析を回避したことによって、女性化を誤って解釈したとヒルデブランドは結論づけた³⁰⁾ [p. 14]。こうした単純な図式化を避けるために、女性専門職の研究では個人的な記録に基づく女性の領域に着目する見方と階級闘争的な視点を持ち込むマルクス主義的な見方の二つが必要であることをヒルデブランドは示唆した³⁰⁾ [p. 20-21]。

田口は、1997年に論文「図書館女性史をもとめて『文化の使徒』の評価をめぐる」³²⁾と題する論文を発表した。この論文は同書に関して出された論考を包括的に展望したもので、ギャリソンが提出した女性専門職にかかわる解釈をめぐる行われた多様な議論を精緻に分析し整理している。田口の論文において、ギャリソンへの批判が詳しく取り上げられる一方で、複数の論者が『文化の使徒』の問題点や矛盾点を挙げつつも、同書が図書館史研究において重要な位置づけにあることを認めていることが示唆されている。田口は主にヒルデブランドによるギャリソンの批判について論じており、ヒルデブランドは“『使徒』を梃子に、図書館女性史を考え続けている”と表現し³²⁾ [p. 149]、図書館女性史研究を開拓してきたヒルデブランドの軌跡についても詳しく分析している³²⁾ [p. 152-155]。

『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾は2003年に新装版が刊行された。同書に序文を寄せたポーリーは、ギャリソン以降の図書館史研究を展望した上で、現在でもなおこの領域に関する包括的な図書館史の記述として、ギャリソンの著作が唯一の存在であることを強調している。分析精度の高い研究は多くなされるようになったが、図書館における女性専門職の全体像を映し出すような研究がいまだに現れていないからである¹¹⁾ [p. xxix]。

ポーリーが指摘するように『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』は図書館女性史研究の唯一のまとまった著作であり、その影響力は刊行から30年以上を経た今も、衰えていない。ギャリソン以降の図書館女性史研

究者は、ギャリソンの提出した図書館職に関する命題に挑戦し続けているといえる。

C. 『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍，1900-1917年』

『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍，1900-1917年』¹⁴⁾は、1994年に刊行されたパセットの著作である。同書は20世紀初頭に西部で活躍した図書館員の個人的記録を精緻に分析し、女性図書館員の個人的プロフィールと図書館専門職の関係性に切り込んだ点が高く評価された。

ヒルデブランドはパセットの研究を、女性の文化を単に賞賛する保守主義の研究ではなく、個人資料を多く用いて女性図書館員の多面的な像を浮かび上がらせたという理由により、1990年代の代表的な研究として高く評価している¹⁰⁾ [p. 86-87]。

パセットの著作は、それまでの東部を中心とした女性図書館史のフィールドを西部へと拡張し、開拓地域でジェンダーの概念に挑戦する女性図書館員の活動を描いている。パセットの研究は未解明であった西部における女性専門職の活動を明らかにすると同時に、個人の経歴を深く掘り下げることで、女性図書館職員像を再構築することに成功した。

パセットが「文化の十字軍」として挙げたのは、西部を代表する図書館員キダー (Ida A. Kidder)、アイザム (Mary Frances Isom)、ベーカー (Charlotte A. Baker)、スウィート (Mary Belle Sweet) であり、この4名の西部での活動が「女性の専門職としての歴史を評価しなおし、取り戻すための基盤」として提示された¹⁴⁾ [p. 155]。

女性と図書館員の置かれた状況をパセットは次のように表現している。“西部の図書館員は、近年組織化された分野を正当化することと、専門職女性として新しい地歩を築くという、二重の挑戦に直面した。内向的な本好きのオールドミスという20世紀に広まった図書館員のステレオタイプと正反対で、……西部のコミュニティへ図書館

サービスを始めるという過程自体が、彼女たちを男性的な環境に置き、社会的、政治的、かつ経済的な自覚と能力を高めたのである”¹⁴⁾ [p. 175]。女性図書館員は女性性という枠組みにあって、実質的には男性的な働きをしていた。しかも女性図書館員は女性性という枠組みを放棄せず活動の実質に合わせて“その方が有利だったり、政治的に賢明であると考えたときには、女っぽくしてみたり、依存的な態度をとった”のである¹⁴⁾ [p. 176]。

西部の図書館員は、すでに東部で確立されていたライブラリアンシップを西部に移入するために活動を展開したが、西部の状況はすでに公共図書館がコミュニティに確立していた東部とは異なっていた。女性図書館員は図書館作りのために多様な関係者および住民と接触する必要があった¹⁴⁾ [p. 3]。図書館運営の向上を実現するため、女性図書館員は行政担当の男性、非都市部や労働者階級の住民と多様な交渉を行うことで、専門職としての役割を果たしていったことがパセットの著作から明らかにされた。

D. 『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』

ヴァンスリックの『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』¹⁵⁾は、1989年にカリフォルニア大学バークレー校に博士論文として提出された同名の論文を元に書かれた図書である。同書は、20世紀初頭のカーネギー図書館と女性図書館員を主題とする研究書であり、図書館建築という領域からみたジェンダー、階級などの分析概念を用いて図書館専門職の本質を浮かび上がらせた³³⁾。

ヴァンスリックが建築様式との関わりで着目したのは、図書館専門職の多数を占めていた女性図書館員であった。少数の例外を除けば、多くの女性図書館員は男性図書館員の下で補佐的な仕事に従事していた。女性図書館員の職務内容は男性図書館員によって決定づけられ、カーネギー図書館の建物は支配構造を具現化したものであった。建築史家としてのヴァンスリックは、カーネギー図

書館という職場の物理的枠組みと、そこで実際に働く女性専門職を分析することで、女性図書館員の存在意義を明らかにしていくという独特のアプローチを取った。

女性図書館員の職場での行動を細かく分析したヴァンスリックは、女性図書館員はみずからの専門職としての活路を図書館設計者や幹部の意図とは異なる領域に見出していったことを実証した。女性図書館員は男性幹部職員が期待するようなふるまいをしばしば逸脱し、また貸出機が象徴するような物理的拘束力のある職場環境から抜け出し職務を行っていたのである。ヴァンスリックによって示された女性図書館員の行動は、女性専門職をめぐる言説の解体を迫るものであった¹⁵⁾ [p. 164-167]。

ヴァンスリックの研究の新しさは、本文に埋め込まれた対立軸にも発見することができる。同書では男性対女性という対抗軸を中心に、階級や民族をめぐるさまざまな対抗軸が示されることで、公共図書館の文化政治的な構図が描き出されている。たとえば、中産階級の利用者対労働階級の利用者といった階級の対立軸、アメリカ人エリート対移民といった民族の対立軸を提示することで、図書館が支配関係にある複数の抗争のなかに置かれていたことを明らかにした¹⁵⁾ [p. 262-263]。

ヴァンスリックの研究成果は、図書館を存立させている文化的諸力を解明していくという図書館研究の新たな方向性を示すものであった。パセットの研究とともにギャリソンの提示した女性専門職の平板な解釈と単純なモデル化を越えた記述と考察によって、1990年代以降の図書館女性研究史において大きな転換点となった。

E. 『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』

ポーリーは1996年、ウィスコンシン大学マディソン校でウィーガンドの指導のもとで執筆した博士論文を2001年に『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』¹⁶⁾ という図書にまとめ

た¹⁷⁾。

この研究では19世紀後半のアイオワ州オーセージを研究対象として、特定のコミュニティにおける読書の様態が解明されている。ポーリーは住民の読書が、ジェンダー、階級、出身地、宗教、政治的立場とどのように関わっているのかを複数の読書実践から分析している。学校教育、公共図書館、教会活動に関わる読書や、退役軍人協会 (Grand Army of the Republic) 女性禁酒同盟 (Woman's Christian Temperance Union: WCTU)、女性参政権協会 (Woman Suffrage Society) など地元団体と活字文化の関わりや、当時の最もよく読まれていた印刷物である新聞が分析軸として設定され、コミュニティの読書を複数の角度から見ている。

ポーリーの公共図書館史研究の方法論において特に評価すべき点は、公共図書館での読書様態を明らかにするために、貸出記録を分析したことであった。図書館の利用者が実際に何を読んでいたのか、その利用者がどのような社会的位置づけにある人物なのかといった点は、既存の図書館研究では追究されてこなかった。図書館史研究は実証的なデータが欠落した状態で、男性をノンフィクションの読者に、女性をフィクションの読者に結び付けて、図書館利用者を規定してきたのである。

ポーリーはコミュニティの読書が学校や教会および公共図書館などの複合的な文化的環境のなかに成立していた点、なかでも公共図書館がコミュニティの住民の読書に与えた文化的影響力を浮かび上がらせた。既存の研究では、高学歴と低学歴の利用者による図書選択や、階級や性差による読書は、高級文化と低級文化という二分法によって説明されてきた。しかし利用者は高級文化と低級文化の間を自由に行き来し、性、階級、宗派にとらわれず自由に読書活動を行っていたことが貸出記録の分析によって明らかになったのである。ポーリーの研究は一次史料を用いて分析の精度を高めることで、従来の研究では明らかにされていなかった図書館利用にかかわる複数の側面を解明することに成功し、批判的研究の方法論としての

深化が示されている。

ポーリーの研究においてジェンダー概念は、階級や宗教など他の属性が交差する場で検討されている。このことはジェンダー研究が、関連する他の分析概念を視野に入れた複合的な状況を解明する領域であることを示すものでもある。

F. 『図書館員としての新しい女性：アデレード・ハッセの生涯』

2006年にベックが発表したアデレード・ハッセの伝記『図書館員としての新しい女性：アデレード・ハッセの生涯』¹⁸⁾は、図書館女性専門職の伝記研究に関して現時点での到達点を示す業績になっている³⁴⁾。

ハッセは19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した女性図書館員である。1889年にロサンゼルス公共図書館で図書館員としての仕事を始め、その後、政府印刷局刊行物管理部を経て、ニューヨーク公共図書館に移った。その後1918年に解雇されるまで、同図書館の図書館員を21年間務め、その後は、ワシントンDC.の情報機関の図書館員を歴任した。

ベックは女性参政権運動の高まりに代表される第一次フェミニズム時代を生きたハッセを、同時代の女性の先陣を切って活動する「あたらしい女性」として描き出した。そしてハッセの職業人生において現れた諸問題、すなわち昇進、同僚や上司との関係、不当解雇などをめぐるジェンダー問題を詳しく書き込むことで、20世紀初頭の女性専門職の直面した多くの困難を明らかにした。

ベックは伝記研究の方法論についてそれほど明示的に記述しているとはいえないものの、研究に用いた資料については、詳しく解説している。ベックがハッセの生涯を分析するにあたって主に利用した一次史料は、アメリカ議会図書館文書とニューヨーク・パブリック・ライブラリー文書である。前者はハッセの死後残された文書を親族がアメリカ議会図書館に寄贈したもので比較的小規模なコレクションであり、後者はニューヨーク・パブリック・ライブラリー時代のハッセの活動にかかわる一部未整理のコレクションで、ハッセ

の解雇にかかわる訴訟記録も含まれている¹⁸⁾ [p. v-vii]。

ベックはこれらの一次史料と新聞、雑誌、同時代の文献を包括的に調査することによって、それまでハッセと敵対した男性側から描かれていたハッセのキャリアをとらえ直すとともに、先行研究では無視されてきた業績を含め、職業人生の全容を解明していったのである¹⁸⁾ [p. 335]。

同書は(1)一次史料の掘り起こし、(2)女性専門職の捉え直し、(3)女性専門職研究に対する批判的観点の提示という3点によって、批判的ジェンダー研究の代表的な研究業績としてとらえることができる。

IV. 図書館における女性をめぐる議論： 二つの系譜

本章では、すでに述べた二つの系譜「図書館女性に関する実践的論考・調査・研究」と「図書館女性に関する理論的研究」を踏まえ、図書館における女性をめぐる議論の展開を見ていく。

第I章で述べたように、この二つの系統の間に明確な分離点があるわけではない。そもそも図書館の実践活動と図書館研究の間には常に往復運動が繰り返されてきた。両者は支援関係だけでなく対立・葛藤も含め強い影響関係にあり、純粋な学術研究であっても、研究は実践との関係を断ち切ることはできない。

本研究の目的は公共図書館史研究におけるジェンダー概念の方法論的有効性を検証することであり、その意味では理論的研究の系譜がより重要である。しかしながら理論的研究の背景として、図書館における女性をめぐる議論や実践に近い論考・調査・研究を把握することは重要である。そのため本章では実践的議論と理論的研究の系譜を整理し概観する。

A. 図書館女性に関する実践的論考・調査・研究の系譜

1. 19世紀後半から1970年代：女性専門職の出現と図書館専門職研究の開始

アメリカでは19世紀末から20世紀の初頭にか

けて、女性はそれまで家庭内で担っていた役割をコミュニティへと拡大していった。女性の社会参加はヴィクトリア朝時代の女性のモラルを家庭だけでなく社会に還元することを目的に行われた³⁵⁾ [p. 3-4]。19世紀末に設立された女性禁酒同盟やキリスト教女子青年会 (Young Women's Christian Association: YWCA) といった組織による社会改良運動は女性の社会進出の一例である。この時期は女性参政権運動に代表される女性の権利拡張運動が隆盛し、第一次フェミニズム運動の時代と呼ばれる。

女性専門職の職場への参画も本格的に始まり1910年までに教員の80パーセント、看護婦の93パーセント、図書館員の79パーセントは女性が占めるようになった³⁵⁾ [p. 7]。

この時期に従来の男性図書館員による蔵書構築中心の図書館業務は、女性の参入によって利用者中心の図書館サービスへと転換されていった。具体的には都市部の女性図書館員は児童サービスに、地方の女性図書館員は農村部への図書館サービスの普及にそれぞれ取り組んだ³⁵⁾ [p. 10]。

女性専門職に関する議論は、19世紀後半の図書館界における女性の進出と同時に始まり、この時代は、図書館女性専門職研究の源流となる論考の出現期とみなすことができる。

1952年にブライアンが上梓した『公共図書館員』¹⁹⁾ は社会科学研究会議 (Social Science Research Council) が実施した大型プロジェクトである「公共図書館調査」の報告書として刊行され、公共図書館員に関する最初のもまとった著作となった。ブライアンは公共図書館員を調査するにあたって、専門職としての位置づけ、給与、キャリア、教員など多岐にわたるテーマを取り上げ、詳細な調査と分析を行っている。報告書の中でブライアンは女性と男性の地位や給与の差を二重キャリア構造として明示し¹⁹⁾ [p. 114]、後に女性専門職研究に影響を与えた。

2. 1960年代から1970年代：第二次フェミニズム運動と図書館女性専門職の動向 女性解放運動の萌芽期である1960年代から

1970年代は、図書館界の女性専門職にとって節目となった。というのも、1980年代以降ジェンダーという概念の形成に影響を与えた女性をめぐるオルタナティブムーブメントとフェミニズム運動が、1960年代後半に開花したからである。

1960年代は、ベトナム戦争や公民権運動などが象徴する社会運動の時代であり、こうした動向に影響を受けた図書館界でも、既存の体制に対する異議申し立てがさまざまな形で示された。図書館女性専門職との関連では1970年にアメリカ図書館協会の社会的責任ラウンドテーブルの中に「女性図書館職員の地位に関するタスクフォース」 (Task force on the Status of Women in Librarianship) が設置された。さらに1975年には同じくアメリカ図書館協会に「女性の地位委員会」 (Committee on the Status of Women in Librarianship: COSWL) が発足した。アメリカ図書館協会以外の団体としては、「女性図書館職員」 (Women Library Workers: WLW) が設立された。

田口はこれらの図書館界の運動を支えたのは、1960年代後半の女性図書館員に関する調査研究の存在であったと指摘している⁹⁾ [p. 41]。この時代の図書館女性専門職に関する文献の増大は顕著である。1960年代の文献数は155点であり、1950年代の約3倍となった。1970年代の文献数は一気に1,067点まで増えた⁹⁾ [p. 30]。

シラーは1974年に『アドヴァンシーズ・イン・ライブラリアンシップ』に「図書館専門職における女性」²¹⁾ を発表した。この論考は1950年代以降の図書館女性専門職にかかわる調査・報告を整理し、シラー自身が行った調査を加えて、先行研究が明らかにした論点を総括するものであった。1950年代にブライアンが『公共図書館員』の中で、女性図書館員の給与・地位が男性図書館員と比較して常に低く抑えられてきたことを「性差に基づく図書館員の二重キャリア構造」として報告した。そうした性差の不平等が1970年代になっても依然として存在していた。

給与面で言えばアメリカ労働統計局 (U.S. Bureau of Labor Statistics) が1950年にアメリカ図書館協会と連携して行った調査で、専門職・非

専門職に関わらず、図書館の女性職員の賃金は男性の賃金よりも低かった。また高学歴であったとしても女性職員の賃金は低く抑えられていた²¹⁾ [p. 107-108]。地位の面においても、シラーは男女間に差があることを示している。最も端的に差別が示されるのは、政策決定の場における女性の数であった²¹⁾ [p. 112-113]。さらにシラーは他の専門職種と図書館職を比較しながら図書館職の相対的な位置づけの低さを示し、その結果、女性図書館職が図書館職であり女性であるという二重の差別にさらされていることを指摘した²¹⁾ [p. 119]。また個人的特質、職の中断率、離職率、職移動、教育などの観点から、図書館専門職の特徴を探っている。

“図書館職の専門職としての低い評価は女性が数の上で優勢であるからでなく、図書館職に対する低い評価が女性の流入を招いている”と結論づけたシラーの調査結果は、図書館職の女性化を論じる文脈で、その後、頻繁に引用されることとなった²¹⁾ [p. 124]。シラーの研究は、それまで言及されてきた図書館界における男女不平等を先行研究と独自の調査によって実証的に明らかにした点で評価することができる。

1979年にはウェibelらが、1876年から1976年までの図書館女性専門職に関わる文献を集めた『図書館専門職における女性の役割 1876年-1976年：女性の参入・功績と図書館専門職における平等化への闘い』⁸⁾を編纂し、19世紀末から20世紀にいたる図書館女性研究の全体像が明らかになった。

3. 1980年代以降：女性運動と図書館女性専門職に関する議論の進展

アメリカ史において1980年代は、1970年代のフェミニズム運動の反動期とされる。その象徴的な出来事は、1972年に連邦議会を通過した男女平等憲法修正条項 (Equal Rights Amendment: ERA) の廃案であった。1970年代からすでに現れつつあった反フェミニズム運動は1980年代に入ってその勢力を増し、政治的にも保守的な新右翼の台頭がみられた。

一方、図書館界の動きは、フェミニズム運動全体の動向とは時間的なずれが生じていた。すなわち1970年代以降の本格的な女性運動は、1980年代以降の図書館女性専門職に関する議論に反映した。図書館の現場における1970年代の女性専門職をめぐる運動や団体の設立に刺激されたこともあり、1980年代には多くの図書館女性専門職の調査・研究が実施された。またフェミニスト研究者が女性専門職に関わる多くの研究論文を発表した。職業上の男女間の不平等が主要な課題となり、現場と実践研究が強い関係性を持った時代でもある。

図書館女性専門職にかかわる文献リスト『性ゆえに：図書館界における女性の地位に関する文献解題』²²⁾シリーズの出版が1984年に始まった。1980年代以後も図書館女性に関するさまざまな議論がなされているとともに、調査・研究が継続して行われている。その成果は『性ゆえに：図書館界における女性の地位に関する文献解題』²²⁾に掲載された文献リストが示す通りであるが、たとえばハリスの女性専門職についての分析は、図書館女性専門職に関する体系的研究といえよう²⁶⁾。

4. 図書館女性に関する実践的議論のまとめ

図書館女性に関する実践的議論の流れをまとめてみると以下のようなになる。

まず女性専門職の参入に関して、女性専門職の属性や職場における条件などを扱う研究が19世紀後半に現れた。1970年代から1980年代にかけて、図書館女性に関わる文献は量的拡大の時代を迎えた。これは同時代の女性運動および図書館界における女性専門職をめぐる社会運動の高まりに呼応するものであった。1980年代になると図書館女性に関する調査や研究は、すでに定着した図書館界のフェミニズム関連活動を支える理念的基盤としての役割を担うこととなった。図書館女性専門職の特性、職務、地位などの分析が引き続き活発に行われ、男女の差異や女性の抑圧を示す実証的なデータとして用いられた。

図書館女性に関する実践的議論の歴史を振り返った時に、1970年代から本格化したフェミニ

ズム運動が一つの転換点であったことは明らかである。1970年代以前の研究が女性専門職の社会的立場づけを静的に取り扱っていたのに対し、1970年代以降の研究は、時代のアクチュアルな問題意識とかかわる動的なものへと変わったからである。

1970年代から1980年代にかけて発表されたフェミニストによる議論は、ライブラリアンシップにおいて重要な役割を果たしてきた女性専門職の実態を明らかにし、従来の男性中心の図書館史に異議を唱えていた。これらの研究は図書館専門職におけるジェンダーの問題を追究していたものの、主な課題は図書館専門職の先駆者としての女性の貢献についての記述や女性図書館員のキャリア・パタンの分析が中心であり、図書館研究の方法論に対し何らかの新規性をもたらすものではなかった。

B. 図書館女性に関する理論的研究の系譜

1. 1960年代から1980年代—ジェンダー研究の開始

19世紀後半から20世紀半ばまで、図書館界で女性専門職に関する議論は継続的に行われたが、学術的な図書館女性研究の出現は1960年代を待たねばならなかった。1964年にグロツィンガーが刊行したキャサリン・シャープの伝記『力と尊厳：図書館界とキャサリン・シャープ』¹²⁾は、図書館女性に関する理論的研究の最初の成果として位置づけられる。

グロツィンガーの研究以降も継続的に図書館女性史の学術的研究は行われたものの、論文のレベルにとどまり著作としてのまとまりを持つ業績は提出されなかった。女性史研究の系譜の中でグロツィンガーの業績の次に来るのは、1979年のギャリソンの『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾である。同書は、前章で詳しく論じたように図書館専門職の特性を歴史的に跡づけ、図書館界の女性化モデルを提出するものであった。

1980年代にはギャリソンが示唆した図書館専門職の女性化モデルへの批判がいっせいに提出さ

れた^{28), 29), 30)}。しかしこれらの論文はあくまでもギャリソンの著作に対する反論にとどまり、学術研究という面から見れば、新たな成果や方法論を提示するまでには至らなかった。全体としてみれば1980年代は女性図書館史学術研究にとって不毛の時代であった。ただし、次項で論じるアメリカ西部の図書館員を分析したパセツトや、図書館建築から図書館女性専門職に切り込んだヴァンスリックの著作の元になる博士論文が1980年代後半に執筆されていることを考えると、1980年代は新たな図書館女性史研究の萌芽を内部に含んだ時代であった。

2. 1990年代以降：方法論の深化と研究領域の拡張

1990年代は、ジェンダーという概念を分析軸として設定し、図書館実践に対する批判的視座を明確にした図書館女性史研究が本格的に開始された時期である。研究主題に対する分析枠組みと分析概念の明確化、実証的な方法論による問題の解明は図書館史研究の条件となった。女性専門職の研究においても単純な歴史記述は回避され、批判的視座から女性専門職をめぐる言説を再検討する姿勢が求められるようになった。

また研究をめぐる社会的状況の変化を背景に、1990年代以降、図書館史において周縁的な存在への着目が高まりマイノリティを対象とした研究が増加した。『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』(*Libraries and Culture*)の公共図書館史研究のレビューにおいて、図書館女性史研究は2000年まで「図書館専門職における女性」(*Woman in Librarianship*)という見出しの下にリスト化されてきた。2000年以降この見出しは「フェミニズム・民族的マイノリティ、多文化にかかわる図書館サービス」(*Feminist, Ethnic, and Multicultural Librarianship*)に変更され、この見出しの下には、女性、人種、民族的マイノリティなど、図書館領域の周縁概念をテーマとする研究がリスト化されている。

周縁概念は多くの場合、重複して出現するものであり、女性研究では民族的マイノリティを背景

に持つ女性図書館員の研究が1990年代に入って増加した¹⁰⁾ [p. 89-90]。マイノリティ研究では、多くの場合、階級・人種・ジェンダーをめぐる支配構造の解明が求められるのであり、女性専門職の研究は周縁概念を追究する他の領域ともテーマを共有しつつ、そうした領域の一部として展開されるようになった¹⁰⁾ [p. 91-92]。

1996年に、フェミニズムの立場から図書館女性史研究をリードしてきたヒルデンブランドが論文集『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』³⁶⁾をまとめた。この論文集を貫くテーマは「女性専門職の捉え直しあるいは発見」である。第1部は女性専門職個人に焦点を当て、ハッセ、ムーア (Anne Carroll Moore) といった指導的図書館員に関して、先行研究では扱われてこなかった専門的活動の詳細を探っている。第2部は主に女性専門職の地位と給与に現れるジェンダー格差を切り口に、図書館女性史におけるジェンダー問題を追究している。

翻訳者の田口はこの論文集を“ギャリソンへのアンチテーゼ”であると位置づける³⁶⁾ [p. 350]。ギャリソンの批判は1980年代以降、継続してなされてきたが、どれもギャリソンの主張への批判に留まり、公共図書館史研究として新しい方法論と理論を提示するまでにはいたらなかった。しかしながらこの論文集の場合、収録された論文に現れるジェンダー研究に関わる新しい視点と方法論それ自体が、論文の内容と合わせて、ギャリソンの提出した女性専門職モデルの批判となっているからである³⁶⁾ [p. 351]。

1990年代半ばからは、図書館女性に関する理論的研究の代表作が次々と出現している。パセットの『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍、1900-1917年』(1994年)¹⁴⁾、ヴェンスリックの『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』(1995年)¹⁵⁾、ポーリーの『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』(2001年)¹⁶⁾ といった研究成果である。1990年代半ばからは図書館女性史研究における一次史料の文献の利用は、もはや

研究の必須条件となった。一次史料を使った研究成果は女性と図書館にかかわる新たな解釈を生みだしている³⁷⁾。

図書館女性に関する実践的論考の場合、研究を促す主たる要因がフェミニズム運動に代表される社会動向であるのに対し、理論的研究では別の影響力が研究促進の推進力となっている。たとえば一次史料の確保を可能にするアーカイブズの整備とインターネットによる一次史料へのアクセスは1990年代半ばから急速に進んだが、これらの学術的基盤は理論的研究のレベルを高める直接的な推進力になった。また別の要因としては、アカデミックな影響力によるものもある。たとえば多様な文化現象を周縁部分からとらえる視点や、文化実践を批判的にとらえる方法論には、1990年代に文化研究の方法論として登場したカルチュラル・スタディーズの影響が表れている³⁸⁾。カルチュラル・スタディーズは、マルクス主義的な階級闘争の考え方を基盤としているが、要素間の関係は抑圧・被抑圧という単純な二項対立としてではなく、複数の要因が織りなす抗争関係をみていくものである。1990年代以降の図書館女性史研究は、カルチュラル・スタディーズに代表される文化研究の新たな潮流を取りこんでいる。

一方、1990年代以降の図書館女性史研究にかかわる重要な動向として、図書館史に関わる研究領域の拡張を挙げておく必要がある。批判的公共図書館史研究の主導者であるウィーガンズは、この時期に批判的研究の新たな領野として、読書や出版を研究対象とするプリント・カルチャー研究を示し、読書や多様な読書装置を対象とするリーディング・スタディーズを公共図書館史研究に導入することを提唱した⁵⁾。

批判的公共図書館史研究の理念を共有するリーディング・スタディーズは、周縁文化へ着目することで、主流文化を中心とした文化政治構造の見直しを迫るものである。なかでも読書研究や出版研究に、周縁文化としてのジェンダーの視点を投入した論考は、図書館女性史研究のあらたな方向性を示している。2006年に出版された『女性とプリント・カルチャー』(Women in Print)³⁹⁾は、

19世紀から20世紀のアメリカ女性と出版文化に関する論集である。同書は読者、編集者、図書館員、作家、ジャーナリストなど出版および周辺領域に位置していた女性と出版文化の関係性を、緻密な分析によって明らかにしている。各論考は家庭的なるものと公共空間の複雑な関係性を扱っているのだが、そこで両者を結ぶ媒介として出版文化が分析対象として焦点化されている³⁹⁾ [p. xvi]。序文の中でロングは出版文化をめぐる女性の社会的活動には、人種・階級・ジェンダーのみならずセクシュアリティや宗教といった要素が関連していることを指摘している³⁹⁾ [p. xix]。

3. 図書館女性に関する理論的研究のまとめ

図書館女性に関する理論的研究の流れをまとめてみると以下ようになる。

1960年代末に出現したグロツィンガーの『力と尊厳：図書館界とキャサリン・シャープ』¹²⁾は最初的女性専門職に関する学術的な研究であった。1979年に刊行された『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年』¹³⁾は、図書館界のアウトサイダーである社会学者ギャリソンによって示された女性専門職の包括的なモデルが、図書館女性史研究の転換点となったが、同書は女性化が図書館専門職の確立を妨げたとする解釈によってフェミニスト研究者からの批判の対象となった。

1990年代に入り、図書館女性史研究において文化政治学的視点を、研究課題の設定と分析方法の中で明確に示す批判的ジェンダー研究が出現した。これらの研究は女性の図書館活動をめぐる権力構造を解明しつつ、批判的視座から研究対象を記述するものであった。また1990年代に入ってマイノリティをはじめとする図書館の周縁的な存在に焦点を当てた研究が本格化した。それに伴い図書館女性史研究には、ジェンダー、人種、階級など複数の分析概念が交差する場として図書館をとらえ記述する方法が求められるようになった。

一方、図書館研究を拡張し、読書をめぐる諸現象を研究対象とするプリント・カルチャーの導入は、図書館女性史研究にも研究対象の拡張と方法

論的側面で影響を与えている。

図書館女性に関する理論的研究の歴史を振り返る時、そこに二つの転換点を認めることができる。ギャリソンの女性専門職モデルの提出およびそれに対する批判的議論が一つ目の転換点であり、もう一つの転換点が1990年代以降に始まる批判的ジェンダー研究の出現である。

V. 批判的ジェンダー研究の視座

前章で見てきたように、1990年代以降、図書館女性に関する理論的研究は、ジェンダーという分析軸によって図書館界の文化政治学的な支配構造を実証的に検証する批判的ジェンダー研究として展開されるようになっていく。本章では批判的ジェンダー研究について、研究課題、研究の枠組み、明らかにされた点を見ていく。具体的には、公共図書館を対象に専門職の形成、図書館実践への女性の関わり、図書館利用者としての女性といった特定のテーマを扱い女性をめぐる文化政治学的な権力構造に着目した研究を取り上げ、批判的公共図書館史研究としての女性研究の成果を示す。

A. 公共図書館における女性専門職のキャリア形成

初期公共図書館史における女性研究の中でもとりわけ女性が図書館専門職に参入した時期の女性図書館員の職務とキャリアの分析については、すでに研究成果が蓄積されている。特にパセットの『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍、1900-1917年』¹⁴⁾やヴァンスリックの『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』¹⁵⁾が発表されてから、女性図書館員の個人に焦点を当てた研究や、女性専門職をめぐる政治文化的構造を解明する研究はこの領域で主流になった。

論文集『ジェンダー図書館史』(*Gendering Library History*)には、さまざまなタイプの批判的ジェンダー研究が収められている。ここではジェンダー論、図書館専門職における女性像、女性の利用者、図書館史におけるフェミニスト

運動など多様なテーマが取り上げられている。いずれの論考も図書館実践にジェンダーの視点を投入した分析を行っている⁴⁰⁾。たとえばプラマー (Mary Wright Plumer) の生涯を詳しく分析したマックは、プラマーの職業人としての歩みに影響を与えた2人の女性イタリア女性図書館員サッコニ・リッチ (Giulia Sacchoni-Ricci) およびフランス国立図書館の図書館員ペルシェ (Marie Pellechet) との交友からプラマーの職業人生を跡づけている⁴¹⁾。マックは女性の職業上の達成について、個人の全生涯の中に位置づけること、公私双方の領域の交わりのなかでとらえることの必要性を指摘している⁴¹⁾ [p. 78]⁴²⁾。

マックは別の論文でも、アメリカ図書館界に女性が進出したことによる影響を、女性の指導的図書館員の言説から探っている。西部の図書館員について分析したパセットと同様、マックも女性図書館員が女性性を状況によって使い分けることで、専門職としてのキャリアを築き、女性性を無視したり拒否するのではなくそれを肯定していた⁴³⁾ [p. 56]。アメリカ図書館協会で活動した女性の大部分は、性差によって自分たちを男性社会から分離するよりも、むしろ融和や歩み寄りの路線を取っていた⁴³⁾ [p. 57]。

またハンセンら (Debra Gold Hansen, Karen F. Gracy and Sheri D. Irvin) は、19世紀末から20世紀初頭のロサンゼルス公共図書館における3人の女性図書館員フォイ (Mary Foy), ケルソー (Tessa Kelso), ジョーンズ (Mary Jones) に焦点を当てて、図書館における女性化を探っている⁴⁴⁾。3名はともに図書館の女性化が最も急激な進展の中で女性管理職を務めたが、3名それぞれが図書館職員研修、図書館の運営目標の見直し、コミュニティの文化的ネットワークの構築に邁進する中で、男性の幹部や行政担当者との間に軋轢があったことが明らかにされている⁴⁴⁾ [p. 338-341]。

シュタウファー (Suzanne M. Stauffer) は、西部の代表的な女性図書館指導者であるダウニー (Mary E. Downey) の業績を詳細に論じている⁴⁵⁾。この研究でシュタウファーは、ダウニーが単に図書館未開発地域に図書館サービスを拡大しただけ

でなく、図書館員教育に力を入れたことを明らかにした⁴⁵⁾ [p. 50-53]。パセットやシュタウファーの業績は、自己の信条を専門職実践の軸として仕事を進めた新しい女性図書館員像を描き出すことに成功している。

女性図書館員が図書館の外部に活動の場を切り開いていったプロセスは、ボイド (Donald C. Boyd) の研究にも示されている⁴⁶⁾。ボイドはケンタッキー州における1936年から1943年にかけて雇用対策局 (Works Progress Administration: WPA) プログラムの一環として行われた荷馬図書館 (Pack Horse Library) プロジェクトを調査した。このプロジェクトはニューディールの経済復興対策の一部であり、女性の雇用の促進と図書館サービスの拡大を目的として行われた。ボイドはプロジェクトの分析を通じて、農村部における図書館サービスと女性図書館員の関係を解明した⁴⁶⁾ [p. 111]。

この地方の図書館サービスとしては、すでに1896年にケンタッキー女性クラブ連盟 (Kentucky Federation of Women's Clubs: FWC) が図書館拡張プログラムを実施していた⁴⁶⁾ [p. 114]。連盟は1905年に巡回図書館を開始し、1910年にはケンタッキー図書館連盟 (Kentucky Library Commission) が設立され、1916年に最初の荷馬図書サービスが始まった⁴⁶⁾ [p. 114-115]。しかしながら、荷馬図書館プロジェクトが来る前のアラバマ地方は識字率も低く、文化的に隔絶された地域だった⁴⁶⁾ [p. 112-113]。

1936年に始まった荷馬図書館プロジェクトでは、図書館員として20代半ばから30代半ばの地元の女性が雇用され図書館活動に着手した⁴⁶⁾ [p. 120]。荷馬図書館プロジェクトの活動最盛期は1937年で、貸出は月6万冊に達し、26,000世帯、155の公立学校へのサービスが行われた。1937年にはペニー財団 (Penny Foundation) から財政援助を受け、映写機と映画40本を購入している⁴⁶⁾ [p. 122]。

女性図書館員が住民に届けたのは図書だけではなく、時には家庭に入り聖書の一節を家族に読んで聞かせることもあった⁴⁶⁾ [p. 123]。馬に

乗った女性図書館員が知的に孤立した住民に対し外界への視野を開かせたことについてボイドは、荷馬図書館がアパラチアの住民に届けたのは、図書以上のもの、時には信仰心でさえあったと指摘する⁴⁶⁾ [p. 123, 125]。

ボイドが荷馬図書館プロジェクトの成果として挙げているのは次の2点である。第1に地元女性の雇用を促進したことである。そのことにより利用者の図書館サービスへの信頼度は高まり、健全な読書欲求へと導かれた。第2にプロジェクトがきっかけとなって、恒久的な図書館サービスへの要求が生まれた点である⁴⁶⁾ [p. 124]。

B. 公共図書館運動をめぐる女性の関与

アメリカで1850年頃にコミュニティに誕生した女性クラブは会員の知的要求に基づく読書会や勉強会を通じ、相互の学びあいを目的とする自助組織である。クラブのメンバーは社会改良運動を目的にして活動を展開し19世紀末の女性の社会活動において重要な役割を担った。女性クラブの活動は多岐にわたるものの、活動の核となるのが読書を通じた学習活動であった⁴⁷⁾ [p. 5]。メンバーは図書、雑誌、新聞などのメディアを使って読書を行い、時には文章を寄稿することに知的向上の活路を見出していた⁴⁷⁾ [p. 8-9]。

多くの女性クラブは自らの手で図書館を設立するか、あるいは地域の図書館設立に関わったため、女性クラブとアメリカの公共図書館の設立には直接関係があった⁴⁸⁾ [p. 74]。1933年当方で、75パーセントの公共図書館が女性クラブにその源を持つものであった⁴⁷⁾ [p. 122]。女性クラブのメンバーの図書館運動は、クラブ内での図書の共有から始まった。それをコミュニティ内での共有へと発展させ、さらに図書にアクセスできない地域へ図書を送り届けるための巡回文庫へと活動を広げた。この一連のプロセスが図書館設立への関心と実際の運動へとつながっていった⁴⁹⁾ [p. 235]。

ワトソン (Paula D. Watson) は女性クラブと巡回文庫のかかわりを丹念に調べ、今日の公共図書館の基盤の一つとして、女性クラブによる巡回文

庫があったことを明らかにしている⁴⁸⁾。

女性クラブの設立時には、図書館蔵書は非常に重要な役割を果たしていた。設立当初の女性クラブは学習に十分な資料を持っていなかったため、巡回文庫の資料は真っ先に女性クラブに配本された。女性クラブのメンバーは巡回文庫の細かい事務手続き、貸出記録の維持、通信文の維持、図書の修繕を担った⁴⁸⁾ [p. 82]。図書館設立のための資金調達、物品販売、バザーそして資金調達のための催しによって行われた⁴⁹⁾ [p. 236]。巡回文庫をめぐる女性クラブの活動は公共図書館設立の刺激になるとともに、州図書館連盟設立に大きく関わった。また州図書館連盟が設立された後も、ロビーイングや助成金によって図書館との関係性を保ち支援を継続した⁴⁸⁾ [p. 88]。

女性クラブのメンバーの図書館活動の動機として、以下のような点があげられる。

- (1) 図書館運動の動機は利己的かつ利他的なものであった。
- (2) 女性クラブのメンバーは、自分たちの読書の成果を他者と共有することを望んでいた⁴⁹⁾ [p. 240]。
- (3) 女性クラブのメンバーは、図書館設立を公共善の実現に向けた社会的働きかけととらえ、図書館設立のための運動を推進していた⁴⁹⁾ [p. 238]。

女性クラブのメンバーは、地理的な障害による図書へのアクセスの困難を克服するというだけでなく、知的に孤立した女性に外部世界への視界を開かせる使命を持っていた⁴⁸⁾ [p. 83]。その活動のエネルギーは、読書を通じて自分の生活を向上させ、同時に他者の生活を向上させるという信念に支えられていた。女性クラブのメンバーは自らの活動をコミュニティの知的向上に寄与する活動としてみなし、その活動がコミュニティ、州、最終的には国家的な知的向上を促すものであると考えたのである⁴⁸⁾ [p. 85]。女性クラブが図書館活動にかかわった動機は、女性クラブの置かれた状況や背景によって異なっていたにせよ図書を運ぶ使命について、女性クラブはその理念を共有していた⁴⁸⁾ [p. 82]。

ワトソンは女性クラブの図書館活動を、女性の私的空間から公的空間への活動領域の拡張の一部として位置づけ、それが社会改良運動すなわち社会的家事 (social housekeeping) として展開されたと指摘した⁴⁹⁾ [p. 263-264]。つまり女性の読書行動は基本的には生活に根ざした個人的な営為であり、しばしば家庭内にとどまっていた。しかし読書行為がいったん女性クラブ、図書館という公的な場所と結びつくことによって社会化され、利用者の社会的意識が育まれたからである。

ワトソンは別の論文で、図書館設立への慈善活動に関わった女性のプロフィールを詳細に分析している。活動に専心した女性の動機はさまざまであったが、皆一様に読書と文学への熱意を持ち、他の慈善活動にも熱心であった⁵⁰⁾。女性の図書館への慈善の発露には、コミュニティにおける住民の公益のための図書館建築への強い動機があった⁵⁰⁾ [p. 177]。公共図書館の教育的ミッションを認識し、図書館がコミュニティの進歩に貢献するという考えを承認していた⁵⁰⁾ [p. 183]。

ところで女性クラブの図書館活動は「公共図書館史における女性の無償労働」という観点からとらえることも重要であろう。マローンは「図書館における女性の無償労働」という論文で、アメリカの初期公共図書館が、文芸活動を中心とする女性のボランティアな活動によって支えられていたことを検証した。マローンは図書館設立にかかわる無償労働に携わった女性に関して、コミュニティの文化的引き上げへの希求という利他的な要素のほかに、利己的な動機にも着目している²⁵⁾ [p. 318]。

女性クラブの会員は資金調達のための活動を積極的に行い、無償労働によってコミュニティの図書館設立に向けて活動した⁵⁰⁾ [p. 162]。ボランティアはアメリカのコミュニティにおける公共図書館設立のための基本的な要件となっていた⁵⁰⁾ [p. 184]。こうした活動に対しマローンは“ジェンダーのイデオロギーがボランティア活動の性格と機能に影響を与えている”こと、“無給の女性の働き手が利用できることが図書館職を方向づけ、かつ図書館職によって方向づけられてきた”

ことを指摘する²⁵⁾ [p. 327]。

こうした女性クラブの活動は、表層的にはコミュニティの知的向上のための活動としてとらえられるのであるが、そこにはジェンダーにかかわるさまざまな論点が埋め込まれている。たとえば女性クラブの文芸活動における利己的側面は、実はしばしば公の目的からは隠されていた。女性クラブはその発露が自己改善にあったにもかかわらず、無私の精神を尊び利己的な精神を排除していたからである。そのため女性クラブのメンバーは自己学習とコミュニティへの奉仕という異なる理念の狭間で二重拘束の状態に置かれた⁴⁷⁾ [p. 10]。

またメンバー自身が望んだのは、社会改良のための知的・社会的活動を進展させることであったにもかかわらず、外部からは家事と類似した実践的な活動が期待されていた⁴⁷⁾ [p. 11]。公的活動にかかわるジェンダーのあり方は、内部・対外部を問わず葛藤・対立する概念の上に成立していたのである。

C. 公共図書館と女性利用者

女性クラブのメンバーとして、あるいは別の形にせよ、女性は男性に比べ量的にも質的にも地元の図書館へのかかわりが強かった。しかしながら図書館研究者が女性の利用者を見過ごしてきたことをムーア (Lindy Moore) は明らかにしている⁵¹⁾。女性が公的領域から除外される社会的背景の中で、女性にとって読書は無駄な行為だと受け取られ、図書館に行くという行動そのものさえ批判の対象となった⁵¹⁾ [p. 100-101]。さらに女性はレファレンス業務やノンフィクションの読書の対象者としても存在が無視された⁵¹⁾ [p. 104]。ムーアが指摘するような女性の不在は、19世紀の女性の抑制された状況を示すものである。

しかしながら当時の図書館には確実に女性の利用者が存在し、自らの知的世界を図書館の中で育んでいた。これらの利用者には焦点を当てたのが、ボストンのユダヤ人とイタリア人労働階級の少女たちの図書館と知的生活について分析したラーソン (Kate Larson) の論文である。ラーソンは「サタデー・イブニング・ガールズ」と名づけ

られたクラブの詳細な描写を通じて、エスニックマイノリティの出身の少女たちにとって、図書館がいかなる意味を持っていたのかを論じている⁵²⁾。

この論文では知的生活とは切り離された移民・労働階級の少女たちが、卓越した指導者である図書館員ゲリエ (Edith Guerrier) によって、知的活動に誘われていく様子が描かれている。また文学、経済、政治、音楽、美術を議論する会合を通じて 図書館がコミュニティと社会を架橋する役割を果たしていたことが明らかにされている。図書館クラブによって知的向上心を育んだ少女の中には、本来の環境からは通常、進み得ない進路を選び、専門職に就いた者もいた⁵²⁾ [p. 198-199]。またアメリカナイゼーションが推進されるなかで、アメリカ文化とエスニックアイデンティティの両方を保持した者もいた⁵²⁾ [p. 202-203]。「サタデー・イブニング・ガールズ」のメンバーはジェンダー・階級、エスニックグループを越えることを望んでいた。少女たちは因習と新たな価値の狭間であって、自らの置かれた環境への確固たる抵抗を示したのである⁵²⁾ [p. 202-203]。ラーソンは労働階級の移民女性の文化的・社会的抑制へのレジスタンスとして、このクラブが機能していたと指摘する⁵²⁾ [p. 225-226]。

ポーリーは、1950年代のウィスコンシン州ドア・カウンティとキウォーニーカウンティの図書館運動に焦点を当てて、農村部における女性の図書館活動を明らかにしている^{53), 54)}。州の援助によるブックモービルの関係者すなわち農家の主婦、教師、図書館員は圧倒的に女性が多かった。そして異なるグループがそれぞれの方法で図書館運営に関わっていた⁵³⁾ [p. 210]。農家の主婦はブックモービルでの社会的活動や読書を通じ、家庭以外の世界に視野を拓げた。また同時に自分たちの活動を記述したり正当化する言葉、そして彼女たちが選択する資料を通じて家庭的なるものの理念をも受け入れたのである⁵³⁾ [p. 211]。ここでは社会的媒介物である図書館や図書が、女性の社会的意識を育みかつ女性に家庭生活の重要性を自覚させることにより、女性の伝統的役割を擁護す

るように働き、女性の二重拘束の状況が作り出されている。

ロングは『ブッククラブ：アメリカ女性と読書』⁵⁵⁾で、女性図書館利用者よりさらに広い女性読者について議論している。ヒューストンを対象とした過去の読書グループと現在の読書グループについての精緻な調査を通じて、読書をめぐる女性性についての多数の発見が示されている。

過去の読書クラブに関してロングは19世紀末の女性と読書にかかわる社会環境を詳しく説明し、具体的にヒューストンの文芸クラブ「淑女読書クラブ」に焦点を当てて、当時の文芸コミュニティを明らかにしている。「淑女読書クラブ」は会員相互の学習プログラムの運営を中心に活動を展開し、クラブは女性が“知的分析をし、意見をもち、かつ擁護し、自信をもって自己表現する世界に彼女たちをつれていった”⁵⁵⁾ [p. 58]。クラブの学習を通じて女性は家庭以外の広い世界に視界が開かれたのである⁵⁵⁾ [p. 58]。一方、ブッククラブの活動は会員同士の相互成長に留まるものではなかった。女性の文芸活動はリテラシーにかかわる社会改良運動と強い結びつきを持っていた。「淑女読書クラブ」の場合、メンバーがヒューストンの公共図書館設置運動に直接かわり、図書館の設立を成功させている⁵⁵⁾ [p. 73]

ロングは“学問領域の割れ目から無人地帯に滑り落ちて”いる読書実践⁵⁵⁾ [p. xii]を、カルチュラル・スタディーズの視点から批判的にとらえている。ロングがここで提示しているのは、同時代のジェンダーをめぐる社会的条件のなかで、自己発展と社会改良を目指す複雑な女性像であり、それまで図書館史で示されてきた静的な女性利用者や女性読者の見直しを迫るものである。

VI. 批判的ジェンダー研究の成果： 図書館実践をめぐる論点に着目して

前章で取り上げた批判的ジェンダー研究は、いづれも図書館専門職における女性をめぐる権力構造に着目して、ライブラリアンシップの構造を解明しようとするものであった。本章ではこうした研究の成果を踏まえて、批判的ジェンダー研究の

成果を(1)女性による図書館実践への意味付与、(2)ジェンダーをめぐる図書館の文化政治的権力構造、(3)図書館実践における周縁文化への着眼、という三つの論点に分けて整理し、そこで提示された批判的視座を明らかにする。

A. 女性による図書館実践への意味付与

アメリカ公共図書館の確立期にあって、図書館の管理職として図書館のサービスや運営のあり方を決定したのは、主として少数の男性幹部であった。しかしながら公共図書館サービスに実際に携わりその基礎を築いたのは、専門的知識を持つ大勢の女性図書館員である。女性はライブラリアンシップの政治的権限の所有者という面ではマイノリティであり、数的には図書館界のマジョリティとして図書館界に位置づけられた。

前章で扱った批判的ジェンダー研究はいずれも、専門教育を受け男性図書館員の下で補佐的な仕事に従事していた女性図書館員について細かい検証を行っている。その結果、男性の図書館幹部主体の図書館史のなかでは明らかにされていなかった、同時代の図書館サービスの細部を浮かび上がらせることに成功した。

たとえば女性図書館員の実践に踏み込んで観察することによって、ヴィクトリア朝の行動範疇のもとで図書館活動を行った模範的な女性図書館員の実践が、必ずしも男性指導者の意向に従うものではなかったことが明らかにされた。パセットは“ジェンダーの制限内で働くことは西部の女性たちが「啓発者」としての活発な役目を担う妨げにはならなかった……女性たちは、西部の歴史において、受身の客体ではなく積極的な参加者である”と述べ、女性という枠組みが常に専門職活動の自由を奪うものではなかったことを示している¹⁴⁾ [p. 14]。男性幹部から託された中産階級の文化の伝道者という役割を女性図書館員は果たしつつ、自らの職業理念に基づいて独創的な業績を残したのである。

女性図書館員にとって、図書館は専門職の実践を通じて自らの職業理念を示し、同時に自己を表現する場として意味づけられた。意識された場合

もそうでない場合も、ライブラリアンシップを通じた自己表現は女性図書館員にとって必然的なものであった。

一方、専門職以外の立場から図書館活動にかかわった女性クラブのメンバー、さまざまなレベルの図書館支援者、利用者など、女性はさまざまな形で図書館の世界にかかわった。それでは図書館員と利用者の中に位置し、専門教育を受けていなかった女性の図書館活動は、どのような理念に支えられていたのだろうか。

すでに述べたように19世紀後半に公共図書館が制度的に確立する以前、多くの図書館がコミュニティの女性クラブによって運営されていた。ヴァンスリックは“19世紀後半に会員制図書館を創立したクラブ女性と同じように、多くの女性が司書職を選んだのは、文化の伝播に内在的素質を有していると考えたからである。実際、多くの女性は自発的に図書館業務を行ったのち、司書としての業務に移行し、移行前後の施設は同じであった”と述べて、専門職と非専門職の未分化を指摘している¹⁵⁾ [p. 141]。ウィスコンシン州の農村部の図書館活動を分析したポーリーによれば、1950年代になっても資格を持たない非専門職の職員が図書館運営の中枢を担っており、専門職と非専門職は未分化な状態であった⁵³⁾ [p. 213]。

図書館員としての専門的資格の有無に限らず、女性は多くの場合、図書館に対する明確なビジョンを持ち、女性クラブや学習クラブで図書館の実践を行った。そして女性が図書館活動にかかわる時、その視座には“人種、階級、民族での社会的格差”が含まれていた¹⁵⁾ [p. 166]。図書館活動を通じて既存の社会的ギャップを埋めていくことは、女性にとって最優先事項に掲げられた。

ポーリーはウィスコンシン農村部の図書館活動をめぐる農村の主婦、教師、図書館員という複数の女性グループを取り上げ、三つのグループがまったく異質でありながらも女性利用者としてのアイデンティティを共有していたことを指摘している⁵³⁾ [p. 212]。

図書館はいずれのグループにとっても、変化のための可能性でもあった。すなわち図書館員に

としては革新的な実践の場として、教員にとっては休息と教職のための刺激として、農村の主婦にとっては情報の取得や娯楽として図書館は存在していた。変化の中身は異なるにせよ図書館は女性たちの人生において触媒の役割を果たしている⁵³⁾ [p. 220]。

ポーリーは地域にもたらされた図書館という新たな文化的変革を取り込むときに、女性が家庭というメタファーを使っていたことを指摘している。つまり自らの過去を否定することなく図書館活動への参加を正当化するために、家庭的なるものを基盤としてそれを変革に組み替えるような言説が用いられた⁵³⁾ [p. 222]。そして家庭のメタファーが伝統に対する抵抗手段や新たな可能性への刺激を表明していたのである。

B. ジェンダーをめぐる図書館の文化政治的権力構造

これまで見てきた先行研究は、図書館史の中で男性を主流に女性をマイノリティ側に配置し、その構図を手がかりに図書館でおこなうさまざまな状況を分析していくことで、今まで明らかにされていない図書館活動の特徴を浮かび上がらせるものである。図書館実践という地平に、男性図書館員、対向軸としての女性図書館員・女性支援者・女性利用者を配置する布置は、主流の視点からの分析に偏っていた従来の研究方法に、新たな分析の枠組みを与えるものである。

とりわけジェンダーに着目し、周縁から主流を照射しながら、ライブラリアンシップの文化政治的構造を再考することは、主流文化・周縁文化のとらえなおしを行うことを意味する。さらに主流・周縁は必ずしも支配・従属という対立構造にとどまらない。前節の実践例が示すように、女性図書館員は自己の職業理念に基づく独創的な活動を展開していた。スタウファーは図書館の女性指導者が、“あらたな女性専門職を創出し、自分たちの関心領域における目的、目標、基準、実践を規定していた”と結論づけている⁴⁵⁾ [p. 56]。ここには形式としての男性による支配と実質的なサービスの展開における女性優位という構造の逆

転がみられる。

また男性幹部の下位に位置づけられていた女性図書館員は、利用者の文化政治的上位に存在し、その行動に影響を与えた。女性利用者はしばしば女性図書館員によって図書館を発見したのであり、その意味において女性図書館員は女性利用者にたいして指導者としてのヘゲモニーを握っていた。つまり女性は被支配者でありながら同時に支配者でもあった。

ピアス (Jennifer Burek Pierce) は、ヴィクトリア時代以降の女性図書館員が同時代の社会改革運動の一部を担っていたことを、女性図書館員による少女の読書に関する指導という点から論じている⁵⁶⁾。女性図書館員は若い女性のための安全な公的領域として図書館を認識し、そこへ導くことで少女たちの知識の向上と社会的道徳の正当性を自分たちの専門職の存在意義に結びつけていたとピアスは指摘する⁵⁶⁾ [p. 323]。

しかしながら女性の指導は“肩書きとは無関係に上下構造の外で行使されたので、認知されずにおこなわれたことになる。多くの女性を特徴づけているのは官僚的権威ではなくて、個人的影響力であった”¹⁰⁾ [p. 88]。女性による女性の支配はしばしば支援と指導の形を取ったのである。

ヴァンスリックは女性図書館員のイメージを“理想的女性にたいする伝統的なステレオタイプを土台にしていた。それは心地よく、順応性があり、手助けを行い、正確にして詳細志向で、本来的に直感的であるが、たいして賢くはないというイメージである”として紹介している¹⁵⁾ [p. 143]。このような女性図書館員に関する平板なとらえかたは、しばしば男性図書館員に共通していた。たとえば図書館の管理職として図書館のサービスや運営のあり方を決定した少数の男性幹部図書館員が女性図書館員に対し求めたのは、実務的な能力を発揮することであった¹⁵⁾ [p. 142]。確かに大部分の女性図書館員はこうした期待に答えたのであり、その後もこの時期に確立された女性図書館員にかかわるイメージは再生産され続けた。

しかし同時に、専門職の図書館内の位置よりも、社会的な使命や自らの行動原理を基点とした

女性図書館員の存在が明らかになってきた¹⁵⁾ [p. 150]。男性専門職優勢にあって女性専門職は、ジェンダーの枠組みに攻勢をしかけたのではなかった。そうではなくむしろジェンダーの枠組みに組み込まれた状態で、自らの職業理念の下に新たな実践に挑戦した。“女性図書館員は自分たちを周縁化する建築的、物質的な設定を無視し、建物自体は2次的な重要性にすぎないと解釈する仕事上の方策を作り上げた”¹⁵⁾ [p. 173] のである。その結果、女性図書館員は男性指導者が考える図書館実践をしばしば超えたところに、ライブラリアンシップを展開することになった。

ヴァンスリックは女性図書館員の行動を“新しく専門職化された図書館員は、効率性という抽象的基準に自分の展望を犠牲にしたくなかった。そしてしばしば、カーネギーが決して意図しない図書館利用法を作り上げたのである”¹⁵⁾ [p. 166-167] と表現し、男性図書館員の行動原理と女性図書館員との差異を指摘している。

本考察では、女性（マイノリティ）対男性（マジョリティ）という視点からジェンダーをとらえ、さらに女性グループの中に存在しうる、専門職、支援者、利用者というクラスに着目している。ただしこのグループはマイクロなレベルで見れば、その内部に文化的差異構造を孕むものである。すなわち各女性グループの中には移民、有色人種の女性が含まれ、同じ女性の専門職グループの中に、さらに主流と周縁の構図を見出すことができる。こうした複雑な構図は、女性史研究が女性を対象とした研究にとどまらず、マイノリティ研究として展開されなければならないことを示すものである⁵⁷⁾。

C. 図書館実践における周縁文化への着眼

女性図書館員たちが行った図書館サービスの事例をやや詳しく見ていくことで、ライブラリアンシップにおけるジェンダーの概念はさらに明確になる。女性図書館員が開拓したサービスの一つに、情報へのアクセスが困難な利用者に対する資料提供サービスがある。現在ではこのサービスはアウトリーチサービスとして定着している

が、その起源は20世紀初頭に女性図書館員が行なった図書提供サービスにさかのぼることができる⁵⁸⁾。アウトリーチは館外活動であるため、図書館サービスの中では周縁的活動としてとらえられる。しかし女性図書館員がサービスの対象とした図書館未設置地域にとって、館外資料提供サービスは図書館サービスそのものであった。女性図書館員の活動にとって、図書館という建物は必然的なものではなかった。ヴァンスリックはカーネギー図書館の研究の中で、女性図書館員が貸出机から離れ、さらには図書館の建物の外部に自らの活動の新たな領野を切り開いていく様子を活写した¹⁵⁾ [p. 164-167]。女性図書館員による「求められていたものに対する反撃」は意識的であるときも無意識的であるときもあったが、20世紀初頭に図書館におけるジェンダーをめぐる抗争は確かに存在していたのである。

また図書館利用におけるマイノリティの存在に着眼してサービスを展開したのも、女性図書館員であった。パセットは西部女性図書館員による移民への外国語資料の提供サービスを紹介する中で、そのサービスが母語資料の提供を基点として“人びとの関心を卓越した文化的な正典に属する資料に向けなおそうとした”段階的なサービスとして展開されたことを明らかにしている¹⁴⁾ [p. 134]。

図書館未設置地域への資料提供サービスも図書館の非主流利用者であるマイノリティへのサービスも、アングロサクソン系白人新教徒（White Anglo-Saxon Protestant: WASP）を中心とする図書館の正統的なサービスとは対極にある。しかしながら非主流とみなされる活動は、実は図書館サービスの本質部分と強く結びついている。たとえば館外への資料提供は、専門職がメディアを介して住民の学習活動を支援するという図書館サービスの原則を実践するものである。またマイノリティへのサービスは、情報へのアクセスが困難な利用者に対し、図書館専門職が介入し支援するという面で、やはり図書館サービスの根幹部分に位置づけられる。周縁サービスと考えられてきた活動は、図書館サービスの中核としてとらえるべき実

践を内包している。

ジェンダー研究が持つ領域は、これまでの図書館の発展要因すなわち男性主導の経営、図書館内の管理運営の向上から図書館史の発展を位置づける視座に対するアンチテーゼであると同時に、図書館サービスの本質を示すものである。図書館で起こる営みを異なる視点から見ていくことによって図書館の閉塞状況、サービスの限界といった言説が、実は主流文化によって規定されたものにすぎないことが明らかにされるのである。

VII. おわりに：批判的ジェンダー研究と批判的公共図書館史研究

本稿はジェンダーを図書館研究の鍵概念としてとらえ、この概念によって展開された図書館女性史研究の中に、批判的図書館研究の新たな方向性と可能性をみようとするものであった。

本稿をまとめるにあたり、ジェンダーという概念が図書館実践および研究にとってどのような意味を持つのか、ジェンダーという概念が図書館研究に対しどのような分析軸となりうるのかを以下に整理する。

ジェンダー概念を図書館の批判的分析に用いたエディ (Jacalyn Eddy) は、ジェンダーを単に性差の相違や性差に対する闘争という問題を越えて、“図書館という機関の過去の言語コード”としてとらえている⁵⁹⁾ [p. 155]。エディは20世紀初頭の公共図書館の論争的なテーマであった、フィクション、児童サービスなどに関して、図書館専門職の中核的メディア『ライブラリー・ジャーナル』に現れる言説を分析している。そして公共図書館がアメリカ社会に定着しようとした時に、図書館界ではいかなる言語によって公共図書館を語り、ジェンダーという語を用いてどのように図書館および図書館専門職を正当化しようとしていたのかを明らかにしている。またそうした図書館界の試みに現れる矛盾した価値や葛藤を描き出すことによってライブラリアンシップが本質的に矛盾する価値を内部に抱えていたことを示唆している⁵⁹⁾ [p. 156]。エディの研究の中でジェンダーという分析視角は、図書館の特定の性質を表

現すると同時に、図書館の存在それ自体を問う概念装置として使われている。

ジェンダー研究が示す実践の捉え直しは当然のことながら、図書館女性史研究にも研究対象に対し、新たな視点による分析を迫るものである。実際に前章で取り上げた先行研究は、ライブラリアンシップにおけるジェンダーの概念を明確にすると同時に、公共図書館サービスの担い手に関わる文化政治的布置を解明するものであった。

ヒルデブランドは、図書館女性史研究が近年保守主義に傾き、理論研究において伝統的な女性像を強調することで、女性専門職における公正へのまなざしが弱まっていることを問題点として指摘した。さらにこの研究動向が理論研究と活動家の断絶を作り出しているとして、理論と実践の乖離を指摘している¹⁰⁾ [p. 86]。しかし、ライブラリアンシップの伝統的な女性像の記述と女性専門職にかかわる文化的公正の追求は、完全に背反するものとはいえないだろう。たとえば専門職的観点からみれば伝統的な女性像として導き出された営為が、営為主体者にとってラディカルな社会的行動として新しい意味を持つことがある。

ライブラリアンシップ全体にかかわる実践の位置づけと特定の実践の個人にとっての意味の間を往復しながら図書館の実践活動を見定めて記述すべきである。ライブラリアンシップの真の課題がアカデミズムと実践の葛藤のなかから解明されていくような方法論が、公共図書館研究において問われているのだが、批判的ジェンダー研究としての図書館女性史研究はそうした課題に応えようとしている。さらに批判的ジェンダー研究は、図書館実践活動にオルタナティブな意味を付与することによって、批判的公共図書館史研究の展開を切り拓く可能性を示しているのである。

謝 辞

本稿をまとめるにあたって、京都大学教育学研究科の川崎良孝先生、実践女子大学文学部の小林卓先生、明治大学文学部の三浦太郎先生から、関連図書館学方法論研究会の折に貴重なアドバイスをいただいたことを感謝します。

本研究は2009年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「批判的図書館史研究の構築」の助成を受けている。

注・引用文献

- 1) Harris, Michael H. The purpose of the American public library: A revisionist interpretation of history. *Library Journal*. 1973, vol. 98, no. 16, p. 2509-2514.
- 2) Harris, Michael H. 図書館の社会理論. 根本彰編訳. 青弓社, 1991, 212p.
- 3) Wiegand, Wayne. “20世紀の図書館・図書館学を振り返る：狭い視野と盲点”. 図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ. 川崎良孝編著. 京都大学図書館情報学研究会, 2001, p. 3-44.
- 4) ウィーガンドが中心となってリーディング・スタディーズの研究拠点として設立した近代アメリカ出版文化史研究センターについては以下の文献に詳しい。Pawley, Christine. “Success on a shoestring,” A Center for a Diverse Print Culture History in Modern America. *Library Trends*. 2008, vol. 56, no. 3, p. 705-719.
- 5) Wiegand, Wayne A. “Introduction: theoretical foundations for analyzing printing culture as agency and practice in a diverse modern America”. *Women in Print: Essays on the Print Culture of American Women from the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Danky, James P.; Wiegand, Wayne A. eds. University of Wisconsin Press, 2006, p. 1-13.
- 6) Wiegand, Wayne A. Out of sight, out of mind: why don't we have any schools of library and reading studies?. *Journal of education for Library and Information Science*. 1997, vol. 38, no. 4, p. 314-326.
- 7) 森岡清美他編. 新社会学事典. 有斐閣, 1993, p. 531.
- 8) Weibel, Kathleen; Heim, Kathleen M. eds. *The Role of Women in Librarianship, 1876-1976: The Entry, Advancement and Struggle for Equalization in One Profession*. Oryx, 1979, 510p.
- 9) 田口瑛子. フェミニズムとアメリカ女性図書館職(吉田貞夫教授追悼号). 彦根論叢. 1989, no. 260, 261, p. 29-44.
- 10) Hildenbrand, Suzanne. “図書館フェミニズムと図書館女性史：アクティヴィズムと学術研究、および公正と文化”. 田口瑛子訳. 図書館文化史研究. 2000, vol. 17, p. 77-99.
- 11) Pawley, Christine. “Reading Apostles of Culture: the politics and historiography of ‘library history’”. *Apostles of Culture: The Public Librarian and American Society, 1876-1920*. Lora Dee Garrison. The University of Wisconsin Press, 2003, p. 17-34.
- 12) Grotzinger, Laurel A. *The Power and the Dignity: Librarianship and Katharine Sharp*. University of Illinois, 1964, Ph.D. thesis.
- 13) Garrison, Lora Dee. 文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会 1876-1920年. 田口瑛子訳. 日本図書館研究会, 1996, 433p.
- 14) Passet, Joanne E. アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍, 1900-1917年. 宮崎真紀子; 田口瑛子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2004, 233p.
- 15) Van Slyck, Abigail A. すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年. 川崎良孝; 吉田右子; 佐橋恭子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2005, 274p.
- 16) Pawley, Christine. *Reading on the Middle Border: The Culture of Print in Late-Nineteenth-Century Osage*. Iowa University of Massachusetts Press, 2001, 265p.
- 17) 文献16)の元になった博士論文のエッセンスは以下の論文にまとめられている。Pawley, Christine. “ビリヤードより良いもの：1890年から1895年のアイオワ州オーセージにおける読書と公共図書館” 吉田右子訳. 図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ. 川崎良孝編著. 京都大学図書館情報学研究会, p. 119-152.
- 18) Beck, Clare. *The New Woman as Librarian: The Career of Adelaide Hasse*. Scarecrow Press, 2006, 348p.
- 19) Bryan, Alice. *The Public Librarian*. Columbia University Press, 1952, 474p.
- 20) Garrison, Dee. The tender technicians: the feminization of public librarianship, 1876-1905. *Journal of Social History*, 1972, no. 6, p. 131-159.
- 21) Schiller, Anita R. “Women in librarianship”. *Advances in Librarianship*, vol. 4, New York, Academic Press, 1974, p. 104-147.
- 22) Heim, Kathleen; Phenix, Katharine eds. *On Account of Sex: An Annotated Bibliography on the Status of Women in Librarianship, 1977-1981*. American Library Association, 1984, 188p.
- 23) Wells, Sharon B. *The feminization of the American library profession, 1876 to 1923*. University of Chicago, 1967, M.A. thesis.
- 24) Jenkins, Christine. *The Strength of the inconspicuous: youth services librarians, the American Library Association, and intellectual freedom for the young, 1939-1955*. University of Wisconsin, 1995, Ph.D. thesis.
- 25) Malone, Cheryl Knott. “図書館における女性の無償労働：変化と継続”. アメリカ図書館史に女性を書きこむ. 田口瑛子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2002, p. 317-341.
- 26) Harris, Roma. *Librarianship: The Erosion of a*

- Woman's Profession. Ablex Publisher, 1992, 186p.
- 27) Hildenbrand, Suzanne. “図書館史における女性：図書館史の政治学から図書館政治学の歴史へ”. アメリカ図書館史に女性を書きこむ. 田口瑛子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2002, p. 3-30.
 - 28) Maac, Mary Niles. Toward a history of women in librarianship: a critic analysis with suggestions for further research. *Journal of Library History*, 1982, vol. 17, no. 2, p. 164-185.
 - 29) Kaufman, Polly Welts. The library in American culture. *History of Education Quarterly*. 1983, vol. 23, p. 83-89.
 - 30) Hildenbrand, Suzanne. “Revision versus reality: women in the history of the public library movement, 1876-1920”. *The Status of Women in Librarianship*. Neal-Schuman Publishers, 1983. p. 7-27.
 - 31) Hildenbrand は別の論文でも, ギャリソンの政治的文脈への過度の強調と女性図書館員に対するステレオタイプの見方について批判している。以下の論文の p. 195 を参照。Hildenbrand, Suzanne. *Ambiguous authority and aborted ambition: gender, professionalism, and the rise and fall of the welfare state*. *Library Trends*. 1985, vol. 34, no. 2, p. 185-198.
 - 32) 田口瑛子. 図書館女性史をもとめて: 『文化の使徒』の評価をめぐって. 京都精華大学紀要. 1997, no. 13, 143-162.
 - 33) 『すべての人に無料の図書館: カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』については, 以下の論文ですでに詳しく分析している。吉田右子; 川崎良孝. ビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究. *図書館界*. 2009, vol. 61, no. 1, p. 2-15.
 - 34) ベックは 1996 年にハッセの短い伝記をまとめている。Beck, Clare. “アデレード・ハッセ: 図書館員としての新しい女”. アメリカ図書館史に女性を書きこむ. 田口瑛子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2002, p. 117-144.
 - 35) Stauffer, Suzanne. “Introduction”. *Library Daylight: Tracings of Modern Librarianship, 1874-1922*, Litwin, Rory ed. *Library Juice Press*, 2006, p. 1-11.
 - 36) Hildenbrand, Suzanne ed. アメリカ図書館史に女性を書きこむ. 田口瑛子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2002, 367p.
 - 37) たとえば第一次世界大戦中の軍隊に設営された図書館における女性図書館員の活動を明らかにしたダニエルの論文は好例である。軍隊内での女性図書館員の存在は公的には明らかにされていなかったのであるが, 図書館の実質的な活動を担っていたのは女性図書館員であった。そうした見えざる活動を明らかにするのは, 書簡や軍の未公開報告書といった一次史料である。Daniels, Caroline. *The feminine touch has not been wanting: women librarians at Camp Zachary Taylor 1917-1919*. *Library & the Cultural Record*, 2008, vol. 43, no. 3, p. 287-307.
 - 38) カルチュラル・スタディーズと図書館研究については以下の文献を参照のこと。吉田右子. 図書館情報学とカルチュラル・スタディーズ. 図書館・情報学研究入門. 三田図書館・情報学会編. 勁草書房, 2005, p. 7-8.
 - 39) Danky, James P.; Wiegand, Wayne A. eds. *Women in Print: Essays on the Print Culture of American Women from the Nineteenth and Twentieth Centuries*, University of Wisconsin Press, 2006. 308p.
 - 40) Kerslake, Evelyn; Moody, Nickianne eds. *Gendering Library History, Media Critical and Creative Arts*, Liverpool John Moores University and Association for Research in Popular Fiction, 2000, 242p.
 - 41) Maack, Mary Niles. “Telling lives: women librarians in Europe and America at the turn of the century”. *Gendering Library History*. Kerslake, Evelyn; Moody, Nickianne eds. *Media Critical and Creative Arts*, Liverpool John Moores University and Association for Research in Popular Fiction, 2000, p. 57-81.
 - 42) プラマーについては以下も参照のこと。Maack, Mary Niles. “No philosophy carries so much conviction as the personal life”: Mary Wright Plummer as an independent woman. *Library Quarterly*, 2000, vol. 70, no. 1, p. 1-46.
 - 43) Maack, Mary Niles. *Gender, culture, and the transformation of American librarianship, 1890-1920*. *Libraries and Culture*, 1998, vol. 33, no. 1, p. 51-61.
 - 44) Hansen, Debra Gold.; Grach, Karen F.; Irvin, Sheri D. *At the pleasure of the board: women librarians and the Los Angeles Public Library, 1880-1905*. *Libraries and Culture*, 1999, vol. 34, no. 4, p. 311-346.
 - 45) Stauffer, Suzanne M. “She speaks as one having authority”: Mary E. Downey's use of libraries as a means to public power. *Libraries and Culture*, 2005, vol. 40, no. 1, p. 39-62.
 - 46) Boyd, Donald C. *The book women of Kentucky: The WPA pack horse library project, 1936-1943*. *Libraries & the Cultural Record*. 2007, vol. 42, no. 2, p. 111-128.
 - 47) Gere, Anne Tuggles. *Intimate Practices: Literacy and Cultural Work in U.S. Women's Clubs, 1880-1920*. University of Illinois Press, 1997, 367p.
 - 48) Watson, Paula D. “Valleys without Sunsets: Women's Clubs and Traveling Libraries”. *Libraries to the People: Histories of Outreach*. Freemant, Robert S.; Hovde, David M. eds. *McFarland & Company*, 2003, p. 73-95.
 - 49) Watson, Paula D. *Founding mothers: the contribution of women's organizations to public library development in the United States*. *Library Quarterly*, 1994, vol. 64, no. 3, p. 233-269.
 - 50) Watson, Paula D. *Carnegie ladies, lady Carnegies:*

- women and the building of libraries. *Libraries and Culture*. 1996, vol. 31, no. 1, p. 159-196.
- 51) Moore, Lindy. "Women: the invisible library users". *Gendering Library History*. Kerslake, Evelyn; Moody, Nickianne eds. *Media Critical and Creative Arts*, Liverpool John Moores University and Association for Research in Popular Fiction, 2000, p. 95-130.
- 52) Larson, Kate. *The Saturday evening girls: a Progressive Era library club and the intellectual life of working class and immigrant girls in turn-of-the-century Boston*. *Library Quarterly*. 2001, vol. 71, no. 22, p. 195-230.
- 53) Pawley, Christine. "A 'bouncing babe,' a 'little bastard': women, print and the Door-Kewaunee Regional Library, 1950-1952". *Women in Print: Essays on the Print Culture of American Women from the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Danky, James P.; Wiegand, Wayne A. eds. University of Wisconsin Press, 2006, p. 208-225.
- 54) なおポーリーは最近になって文献53)の内容を含む、ウィスコンシン州のプリントカルチャーに関する研究書 *Reading Places: Literacy, Democracy, and the Public Library in Cold War America* を上梓したが、これについては別稿で扱う予定である。Pawley, Christine. *Reading Places: Literacy, Democracy, and the Public Library in Cold War America*, University of Massachusetts Press, 2010, 272p.
- 55) Long, Elizabeth. *ブッククラブ：アメリカ女性と読書*. 田口瑛子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 331p.
- 56) Pierce, Jennifer Burek. *Why girls go wrong: advising female teen readers in the early twentieth century*. *Library Quarterly*, 2007, vol. 77, no. 3, p. 311-326.
- 57) こうした視座はすでに女性史研究の中で展開されている。女性クラブの歴史をまとめたゲールは、白人中産階級の女性をメンバーとする女性クラブだけでなく、アフリカ系アメリカ人やユダヤ系アメリカ人といった人種・宗教が異なる女性によって構成された女性クラブを分析していくことで、女性クラブの歴史を再評価している。文献47)を参照。
- 58) アウトリーチの起源としてみなすことができる館外資料提供の先駆けとなった巡回図書館サービスについては以下の文献に詳しい。中山愛理. 19世紀後半のアメリカにおける巡回文庫の導入：州図書館法と実態の検討に基づいて. *図書館界*. 2008, vol. 60, no. 4, p. 226-242.
- 59) Eddy, Jacalyn. "We have become too tender-hearted": the language of gender in the public library, 1880-1920. *American Studies*. 2001, vol. 42, no. 3, p. 155-172.

要 旨

【目的】 本研究の目的は、ライブラリアンシップに関わる批判的観点の一つであるジェンダー（文化的性差）に着目し、図書館史におけるジェンダー研究の分析を通じて、批判的研究の枠組みを検証することである。Michael H. Harris が民主主義機関としての図書館にかかわる批判的視座を提示したのは1970年代であり、その後Harrisの“修正解釈”を踏まえた批判的な視点を基盤とする新たな図書館史研究が展開されるようになった。批判的研究は研究対象となる事象を階級、ジェンダー、マイノリティといった特定の切り口から再検証し、再構築していくことを目指している。

【方法】 批判的図書館史研究の系譜の中にジェンダーを対象とする研究を位置づけるために、アメリカ図書館史研究における図書館女性研究の先行研究の分析を行なった。さらにこれらの文献にあらわれるジェンダーの概念が、公共図書館研究に与える意義について検討した。

【結果】 先行研究を分析した結果、図書館実践という地平に、男性図書館員、対向軸としての女性図書館員・女性支援者・女性利用者を配置する布置は、主流の視点からの分析に偏っていた従来の研究方法に、新たな分析の枠組みを与える可能性を有していることが明らかになった。最終的に公共図書館研究におけるジェンダー概念への着目は、図書館にかかわる主流文化・周縁文化の捉え直しを意味し、図書館をめぐる文化政治的構造を再考するための手掛かりとなることが示された。